— 茨城県土浦市 —

浅間塚西遺跡
房谷遺跡
内出後遺跡（第1次調査）

土浦市内開発行為に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

— 茨城県土浦市 —

浅間塚西遺跡
房谷遺跡
内出後遺跡（第1次調査）

土浦市内開発行為に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

序

霞ヶ浦の畔にある土浦市は、水と緑に大変恵まれた住みやすい場所です。この恵まれた自然環境を受けて、太古の昔からさまざまな人々の暮らしが営まれてきました。市内に残る集落跡や貝塚、古墳などの遺跡は、往年の人々の様子を私達に伝えてくれる大切な文化財です。

この貴重な文化財を調査・研究するとともに、保護して後世に伝えていくことは、現在の私達にとって重要なことでもあります。今後の郷土の発展を考えていくためにも、しばし振り返って新たな過去を見直すということは、実はとても大切なことであると言えます。

このたび、以前に行われた市内の各種開発行為に伴う記録保存を目的とした発掘調査の記録をまとめることができました。調査の結果は本文に記載しておりますが、これらの資料を土浦市の歴史の解明に役立て、子どもたちの代へも引き継がれるよう充分に活用していきたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行にあたり、御協力・御指導いただきました皆様方に厚く御礼を申し上げます。

平成23年３月

土浦市教育委員会
教育長　冨永　善文

例　言

1．本書は、土浦市遺跡調査会が実施した浅間塚西遺跡（土浦市木田余字浅間台2915他所在）・房谷遺跡（小松３丁目740－１他所在）・内出後遺跡〔第１次調査〕（小岩田東１丁目1233－１他所在）の発掘調査報告書である。

2．浅間塚西遺跡の発掘調査は開発事業者である日立電線土浦工場の依頼を受けて、納骨堂建設に伴う事前調査として土浦市遺跡調査会が実施したものである。房谷遺跡は開発事業者である社会福祉法人祥風会の依頼を受けて、有料老人ホーム建設に伴う事前調査として土浦市遺跡調査会が実施したものである。内出後遺跡〔第１次調査〕は開発事業者である株式会社スギヤマ薬品の依頼を受けて、店舗建築工事に伴う事前調査として土浦市遺跡調査会が実施したものである。

3．浅間塚西遺跡の発掘調査は昭和63年（1988）10月３日より11日まで、房谷遺跡の発掘調査は平成２年（1990）１月17日より26日まで、内出後遺跡〔第１次調査〕は平成２年（1990）９月18日より10月４日まで実施した。

4．浅間塚西遺跡の発掘調査は石川功（土浦市教育委員会社会教育課：当時）が担当し、塩谷修（土浦市立博物館）の協力を得た。また出土品の整理及び報告書の作成は、石川が担当し、黒澤春彦（土浦市教育委員会社会教育課臨時職員：当時）・中澤達也（土浦市教育委員会社会教育課臨時職員：当時）・窪田恵一（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）が補佐した。房谷遺跡の発掘調査は石川が担当した。整理作業は石川が担当し、福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）が補佐した。報告書の作成は石川が担当した。内出後遺跡（第１次調査）の発掘調査は石川が担当し、中澤（土浦市教育委員会社会教育課：当時）が補佐した。整理及び報告書の作成は石川が担当した。３遺跡とも総括・編集は石川が行った。

5．浅間塚西遺跡出土管玉未成品の観察及び玉作工程などについては、寺村光晴氏（当時和洋女子大学文学部教授）よりご指導・ご教示頂いた。

6．発掘調査、出土品整理及び報告書の作成については、次の諸氏、諸機関のご協力・ご教示を賜った。（50音順・敬称略。なお肩書きはすべて当時のものである）

茨城県教育委員会　茨城県県南教育事務所　大淵淳志〔日本考古学研究所〕　小川和博〔日本考古学研究所〕　小野治　加藤勝幸　木田余土地区画整理組合　黒沢浩一　社会福祉法人祥風会（株）スギヤマ薬局　土浦市文化財愛護の会　土浦市文化財保護審議会　如宝寺　羽鳥哲生　羽鳥嘉雄　日立電線（株）土浦工場　日立木材地所（株）　増山栄　茂木雅博〔茨城大学教授〕（有）谷田部石材　吉田恵二〔國學院大學助教授〕

7．本書の執筆分担は次のとおりである。統括・編集は石川が行った。

浅間塚西遺跡：第１・３・５・６節：石川

２節は中澤が執筆したものに、石川が一部加筆した。

４節のうち出土遺物の１～５は黒澤、33～36は窪田が執筆し、遺構及びそれ以外の遺物については石川が執筆した。

房谷遺跡・内出後遺跡（第１次調査）：石川

8．写真撮影は石川が行った。

9．本書にかかる出土品及び調査記録図面、写真等は一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。各遺跡出土遺物について、浅間塚西遺跡は「浅西」、房谷遺跡は「ＫＦ」、内出後遺跡〔第１次調査〕はＫＥＵの略称を記してある。

凡　例

1．各遺跡の遺構番号は、報告書刊行にあたっても基本的に現地調査時に付けたものを踏襲しているが、一部整理作業の過程で見直しを行い変更したものもある。

2．本書の遺構・遺物の指示は次のとおりである。

⑴　水糸レベルは海抜高度を示す。

⑵　遺物番号は、本文・挿図・表・写真図版とも一致する。

⑶　遺跡内の遺構等の略称は次のものを用いた。

ＳＤ：溝　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＫ：土坑　ＳＬ：屋外炉　ＳＰ：住居外の単独のピット、ＳＸ：不明遺構　Ｐ：住居内のピット　Ｋ：攪乱

⑷　遺構・遺物の実測図中の表示は次のとおりである。

炉跡：　　焼土（炉跡以外）：　　上記以外は注釈を付して任意の表示を行った。

⑸　挿図の実測図は次の縮尺を基本としている

・遺構平面図・断面図：１／60　・遺物実測図：１／３（土器類）・１／１（石製品・銭貨）

これ以外の縮尺の図面もあり、それらについてはスケールを変えてある。

⑹　竪穴住居跡の「主軸方向」は、カマドや炉、柱穴などの位置から主軸を決め、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。例（N－5°－W）

⑺　遺物観察表について、表中のＡは口径、Ｂは器高、Ｃは底径を示す。（ ）の数値は現存値であり、〔 〕は回転復元径である。

3．下記の掲載遺跡位置図については、国土地理院発行１：200,000地勢図「水戸」（昭和56年編集・平成15年修正・平成17年要部修正）の一部を、また「遺跡の環境」で使用している周辺の遺跡位置図については、国土地理院発行１：25,000地形図「常陸藤沢」（昭和52年改測・平成18年更新）及び「土浦」（昭和52年改測・平成19年更新）の一部を使用し、遺跡位置を加筆したものである。

4．第２節遺跡の環境の周辺の遺跡及び遺跡対象表で使用している３ケタの番号は、茨城県遺跡台帳における各市町村登録遺跡番号と同一である。今回掲載した遺跡はすべて旧土浦市域のものであるため、正式には茨城県を示す08及び旧土浦市を示す203を頭に付けた、08203－○○○が全国遺跡コード番号となる。

浅間塚西遺跡・房谷遺跡・内出後遺跡位置図

土浦市遺跡調査会組織（昭和63年～平成２年度）

※肩書はすべて最終在籍時のものである

会　長	永山　正	（土浦市文化財保護審議会長）
副会長	日下部　晃	（土浦市教育委員会教育長）（昭和63）
	青木利次	（土浦市教育委員会教育長）（平成元～）
理　事	茂木雅博	（土浦市文化財保護審議会委員）
	田中　昭	（土浦市都市計画部次長）（昭和63）
	中山　清	（土浦市都市計画部建築指導課長）（～平成元）
	雨貝　宏	（土浦市都市計画部建築指導課長）（平成２）
	神林栄久	（土浦市産業部耕地課長）（～平成元）
	横田紀夫	（土浦市産業部耕地課長）（平成２）
監　事	杉野利男	（土浦市教育委員会教育次長）（昭和63）
	田中　昭	（土浦市教育委員会教育次長）（平成元）
	藤枝　正	（土浦市教育委員会教育次長）（平成２）
	二野屏昌男	（土浦市教育委員会教育次長）（平成２）
	瀧ヶ崎洋之	（土浦市企画部企画課長）（～平成元）
	廣田宣治	（土浦市企画部企画課長）（平成２）
幹　事	佐野賢治	（土浦市教育委員会社会教育課長）（～平成元）
	田中紀夫	（土浦市教育委員会社会教育課長）（平成２）
	岩沢　茂	（土浦市教育委員会社会教育課課長補佐）
	桜井正広	（土浦市教育委員会社会教育課文化係長）（～平成元）
	加倉井藤雄	（土浦市教育委員会社会教育課文化係長）（平成２）
	石山淳一	（土浦市教育委員会社会教育課係長）
	塩谷　修	（土浦市立博物館学芸員）
	石川　功	（土浦市教育委員会社会教育課主事）
	黒澤春彦	（土浦市教育委員会社会教育課主事）（平成元～）
	中澤達也	（土浦市教育委員会社会教育課主事）（平成元～）

調査参加者（肩書はすべて発掘調査・整理作業当時のものである）

発掘調査：〔浅間塚西遺跡〕石山淳一（土浦市教育委員会社会教育課）・今泉光夫・関野喜久代・松浦いく子・富島栄子・杉田七五三子・浜田久美子・松浦正美・富田シズエ・佐野美沙子
〔房谷遺跡〕入山正三・加藤博司・川村俊夫・野尻きみ
〔内出後遺跡（第１次調査）〕田上紀子・塚田まさ・石浜敏子・長峰道子・川村俊夫・中村節子
整理作業：石川功・黒澤春彦・中澤達也・窪田恵一（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）・福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）・佐藤啓（筑波大学）・飯塚守人（筑波大学）・岡沙織（筑波大学）・大田有里乃（筑波大学）・石井洋介（慶応義塾大学）・須貝和子・浜田久美子・長峰道子・中村節子・佐野みつえ・岩城裕子・大和田とし子・川島幸子・井沢幸子

目　次

序
例言
凡例
目次
第Ⅰ章　浅間塚西遺跡…… 1
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　遺跡の環境…… 2
第３節　発掘調査の経過…… 5
（１）調査区の設定…… 5
（２）調査日誌抄…… 5
第４節　発掘調査の概要…… 6
検出された遺構と遺物…… 6
第５節　考察…… 16
第Ⅱ章　房谷遺跡…… 19
第１節　調査に至る経緯…… 19
第２節　遺跡の環境…… 19
第３節　発掘調査の経過…… 22
（１）調査区の設定…… 22
（２）調査日誌抄…… 22
第４節　発掘調査の概要…… 23
検出された遺構と遺物…… 23
第５節　考察…… 28
第Ⅲ章　内出後遺跡（第１次調査）…… 29
第１節　調査に至る経緯…… 29
第２節　遺跡の環境…… 30
第３節　発掘調査の経過…… 32
（１）調査区の設定…… 32
（２）調査日誌抄…… 32
第４節　発掘調査の概要…… 33
検出された遺構と遺物…… 33
第５節　考察…… 44
第Ⅳ章　総括…… 46
写真図版
抄録

挿図目次

Ⅰ．浅間塚西遺跡（第１～12図）
第１図　調査場所位置図…… 1
第２図　周辺の遺跡…… 3
第３図　調査区位置図…… 5
第４図　遺構（SI-1）平面・断面図…… 6
第５図　遺構（SI-1）エレベーション図…… 7
第６図　SI-1遺物出土状況図…… 9
第７図　SI-1管玉未成品出土状況図…… 9
第８図　SI-1出土遺物（１）土器・土製品…… 10
第９図　SI-1出土遺物（２）管玉未成品…… 11
第10図　SI-1出土遺物（３）石製品等…… 12
第11図　浅間塚西遺跡SI-1、鳥山遺跡A-57号住居跡出土管玉未成品の傾向 …… 18
第12図　浅間塚西遺跡出土資料から想定される管玉製作工程…… 18
Ⅱ．房谷遺跡（第13～20図）
第13図　調査場所位置図…… 19
第14図　周辺の遺跡…… 20
第15図　調査区位置図…… 22
第16図　遺構（SI-1）平面・断面図…… 23
第17図　SI-1カマド平面・断面図…… 24
第18図　SI-1遺物出土状況図…… 25
第19図　SI-1出土遺物（１）…… 26
第20図　SI-1出土遺物（２）…… 27
Ⅲ．内出後遺跡（第１次調査）（第21～31図）
第21図　調査場所位置図…… 29
第22図　周辺の遺跡…… 30
第23図　調査区位置図…… 32
第24図　SL-1平面・断面図 …… 33
第25図　調査区全体図…… 34
第26図　調査区・SI-1・SX-1土層断面図 …… 35
第27図　SD-1平面・断面図 …… 37
第28図　SP-1・SK-1～8平面・断面図…… 41
第29図　出土遺物…… 42
第30図　明治前期の小岩田村周辺
（（財）日本地理センター発行『第一軍管地方二万分一迅速測図原図〔復刻版〕』を部分拡大）…… 44
第31図　小岩田村絵図（『土浦歴史地図』より：原図・国立資料館所蔵）…… 45

表目次

Ⅰ．浅間塚西遺跡（第１～３表）
第１表　遺跡対象表（浅間塚西遺跡）…… 4
第２表　出土遺物観察表…… 13
第３表　土浦市内検出玉作工房跡の規模…… 16
Ⅱ．房谷遺跡（第４・５表）
第４表　遺跡対象表（房谷遺跡）…… 21
第５表　出土遺物観察表…… 27
Ⅲ．内出後遺跡（第１次調査）（第７・８表）
第６表　遺跡対象表（内出後遺跡）…… 31
第７表　出土遺物観察表…… 43

写真図版目次

Ⅰ．浅間塚西遺跡（PL.１～６）
PL.１：遺構検出状況（南より）、遺構検出状況（西より）、管玉未成品集中区出土状況（１）、管玉未成品集中区出土状況（２）、荒割未成品・管玉未成品・砥石？出土状況、荒割未成品出土状況
PL.２：管玉未成品・砥石？出土状況、赤色顔料出土状況（１）、赤色顔料出土状況（２）、遺構完掘（南より）
PL.３：遺構完掘（北より）、住居内貯蔵穴
PL.４：出土土器・土製品
PL.５：出土管玉未成品
PL.６：出土形割未成品・剥片、浅間塚西遺跡出土管玉未成品の製作工程
Ⅱ．房谷遺跡（PL.7～8）
PL.７：遺構検出状況、遺物出土状況、土層堆積状況、カマド確認状況、カマド土層断面、遺構完掘
PL.８：出土土器
Ⅲ．内出後遺跡（第１次調査）（PL.９～16）
PL.９：調査前、表土除去状況、表土除去後の状況（全景）、溝（SD-1）検出状況、溝（SD-1）土層断面
PL.10：溝（SD-1）完掘、屋外炉（SL-1）検出状況、屋外炉（SL-1）土層断面、屋外炉（SL-1）完掘
PL.11：不明遺構（SX-1）検出状況、不明遺構（SX-1）完掘及び土坑（SK-1・2・3・4・５・8）検出状況、不明遺構（SX-1）完掘及び土坑（SK-6・7）ならびに竪穴住居跡（SI-1）検出状況
PL.12：不明遺構（SX-1）及び竪穴住居跡（SI-1）土層断面（北東側）、不明遺構（SX-1）土層断面（南東側）、竪穴住居跡（SI-1）完掘、ピット（SP-1）完掘
PL.13：１号土坑（SK-1）完掘、２号土坑（SK-2）完掘、３号土坑（SK-3）人骨出土状況、３号土坑（SK-3）完掘、４号土坑（SK-4）人骨出土状況、４号土坑（SK-4）完掘
PL.14：５号土坑（SK-5）完掘、６号土坑（SK-6）完掘、７号土坑（SK-7）完掘、８号土坑（SK-8）完掘、不明遺構（SX-1）及び土坑（SK-1～8）・竪穴住居跡（SI-1）完掘状況
PL.15：出土遺物（１）
PL.16：出土遺物（２）

第Ⅰ章　浅間塚西遺跡

第１節　調査に至る経緯

昭和63年（1988）８月に、開発者の日立電線株式会社土浦工場より土浦市教育委員会に、大字木田余字浅間台地区において開発行為を計画しているが、当該地における埋蔵文化財の所在について打診があった。そのため遺跡台帳と照合したところ、付近には浅間塚古墳（当時県遺跡番号5306・市遺跡番号C-21：現遺跡番号202）が存在することが確認された。計画の進展に伴い、９月14日に事前協議申出書が日立電線株式会社土浦工場常務取締役工場長萬代勝昭氏より提出されたため、現地踏査を実施したところ、申請地は上記古墳の隣接地であり、また土師器片の散布も見られる等埋蔵文化財の存在が推定された。そのため同月26日に事業者の協力のもと試掘調査を実施したところ、竪穴住居跡１軒が検出されたため、翌27日付けで文化財保護法第57条の６第１項に基づく浅間塚西遺跡の遺跡発見通知を文化庁に提出した。また遺跡の保護についても並行して協議が行われ、開発面積2,864㎡のうち納骨堂建設部分以外については大規模な掘削は行わない旨が確認されたため、発掘調査による記録保存は納骨堂建設部分のうち遺構が確認された約100㎡分についてのみ行われることとなった。そのため９月28日付で文化財保護法第57条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘届を進達し、30日付で同98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査通知を提出して10月３日より発掘調査を開始した。

第１図　調査場所位置図

第２節　遺跡の環境

浅間塚西遺跡（250）は、茨城県土浦市木田余字浅間台地内に所在する。

土浦市は霞ヶ浦の北西部にあって、桜川・花室川などの中・小河川が流れている。市域は中央部を流れる桜川を中心とした沖積低地である桜川低地を境に、南側は筑波・稲敷台地が、北側には新治台地が存在している。これらの台地は北西より北東へ緩く高度を下げながら続いている。本遺跡は新治台地の南端、標高約26mの南側に桜川河口及び霞ヶ浦を望む場所に位置している。本遺跡の存在する通称浅間台は木田余地内ではあるが、市道１級18号線（通称国体道路）を隔てた西側は真鍋地内であり、真鍋台の東端と見ることもできる場所である。

真鍋台・木田余台は遺跡の分布が濃密な地域として知られており、特に木田余台では古くから耕作に伴って箱形石棺などが発見され、さらに分布調査により多数の遺跡が確認されている。また浅間塚西遺跡と小谷津を挟んだ北側の台地上では、1987年～1991年に木田余土地区画整理事業に伴い大規模な発掘調査が行われ、大きな成果が挙げられている。また真鍋小学校改築に伴い2003年に一部調査された大宮前遺跡（261）などもある。

まず、旧石器時代であるが、木田余台の栄買場遺跡（200）・御昊遺跡（199）・東台遺跡（292）・宝積遺跡（195）や真鍋台の大宮前遺跡などにおいて旧石器が確認されている。これらの年代観については、東台遺跡が約28,000年前と最も古く、大宮前遺跡及び栄買場遺跡が約20,000年前と考えられている。宝積遺跡・御昊遺跡では茨城県南部初の細原型彫器が確認されており、18,000年前と考えられている。また栄買場遺跡では、縄文時代草創期の石器も発見されている。

縄文時代の遺跡としては、宮脇遺跡（196）などで縄文時代前期の土器片が出土したほか、御昊遺跡・東台遺跡において縄文時代中期の住居跡及び多数の貯蔵穴が確認され、大規模な集落が存在していたことが推定される。その後遺構は急激に減少するが、御昊遺跡では後期の住居跡も確認されている。

弥生時代後期になると、再び宝積遺跡に集落が形成されている。発見された弥生時代の竪穴住居跡は楕円形を呈しており、中には直径８mを超える大型住居もあることから、大家族の存在も想定されている。弥生時代後期の遺物は立遺跡（299）や姫塚遺跡（310）など境川東側の手野台上にも見られるので、境川を中心とした生活圏であったことが想定される。

古墳時代になると、真鍋台では1948年の土浦第二中学校建設時に古墳時代の竪穴住居跡が多数確認された東真鍋八坂前遺跡（289）や大宮前遺跡、木田余台では栄買場遺跡・御昊遺跡・東台遺跡・宝積遺跡・一丁田台東遺跡（248）などで集落が確認されている。木田余台では台地東寄りの東台・宝積遺跡には前期・中期の住居跡が多く、西寄りの栄買場・御昊遺跡は後期の住居跡が多い。竪穴住居の形はいずれも方形で、五領・和泉期のものは地床炉で、鬼高期になるとカマドを設置したものが出現する。しかし、鬼高期になっても地床炉を採用しているものも見られるなどの差異も存在している。また大宮前遺跡からは古墳時代前期の緑色凝灰岩を用いた玉作関連資料が出土しており、本遺跡との関連が注目される。古墳としては、真鍋台では真鍋愛宕神社古墳（255）や埴輪片が採集されている西真鍋遺跡（209）の存在が知られているほか、木田余台の東台古墳群（262）が調査されている。東台古墳群は前述のごとく過去において存在は知られていたものの、昭和40年代前半の土取りによりかなりの古墳が失われたと考えられていたが、調査により前方後円墳12基、円墳４基、方墳２基、不明１基が確認され、大古墳群であることが確認された。このうち前方後円墳５基からは箱形石棺がくび

れ部から前方部にかかる位置、主軸線上に埋設されており、最終末の前方後円墳（前方後円形墳）と想定されている。調査結果から推定される本古墳群の形成年代は古墳時代後期・終末期であり、台地上に展開する古墳時代の集落の移動は、この古墳群の形成と関係が深いことが想起される。なお、東台古墳群と境川を隔てた東側の手野台地上には前期古墳として有名な王塚古墳（297）・后塚古墳（298）が存在している点も重要である。また浅間塚西遺跡のすぐ東には浅間塚古墳（202）が存在する。この古墳は霞ヶ浦を見下ろす形で構築されている全長約32m、高さ約1.5mの小型の前方後円墳であるが、現在のところ埴輪などの外表施設は発見されていない。

奈良・平安時代のものとしては、奈良・平安時代の集落が籾買場遺跡・宝積遺跡などで発見されている。中世には東側の手野台に手野城跡（434）、北側の低地に木田余城跡（447）の存在が知られている。真鍋台では、大宮前遺跡から平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物跡や方形竪穴遺構が確認されているほか、木田余台でも地下式坑が確認されている御灵遺跡や、直下の青麻神社境内から16世紀頃のものと思われる埋蔵銭が発見されている。

以上のことからも、この真鍋台・木田余台では旧石器時代から歴史時代にわたる全時期において人々の生活の場であったことが認められる。また新治台地の南端、桜川と霞ヶ浦を望む台地上には、前期古墳から終末期古墳が点在しており、このことからも浅間塚西遺跡との深い関係を考えたい。ただこのことに関しては本遺跡においても資料が少なく、今後の度重なる調査研究がおこなわれることにより、明らかとされるであろう。

第２図　周辺の遺跡

第１表　遺跡対象表（浅間塚西遺跡）

番号	遺跡名	番号	遺跡名
250	浅間塚西遺跡【今回調査】	255	真鍋愛宕神社古墳
195	宝積遺跡	261	大宮前遺跡
196	宮脇遺跡	262	東台古墳群
197	宮崎遺跡	289	東真鍋八坂前遺跡
199	御灵遺跡	292	東台遺跡
200	籾買場遺跡	297	王塚古墳〔土浦市指定史跡〕
201	八坂前遺跡	298	后塚古墳〔土浦市指定史跡〕
202	浅間塚古墳	299	立遺跡
209	西真鍋遺跡	310	姫塚遺跡
246	どんどん塚	434	手野城跡
248	一丁田台東遺跡	447	木田余城跡〔土浦市指定史跡〕

参考文献

豊崎卓1953「真鍋台の古代住居跡」『霞浦文化』第４号　霞浦文化会

土浦市教育委員会1974『土浦市史別編　土浦歴史地図』

土浦市史編さん委員会1975『土浦市史』

土浦市史編さん委員会1976『図説　土浦市史』

土浦市教育委員会1984『土浦の遺跡』

茨城県教育委員会1989『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅴ』

土浦市教育委員会1989『木田余台―茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財概報―』

茨城県教育委員会1991『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告Ⅵ』

土浦市教育委員会1991『木田余台Ⅰ』

上高津貝塚ふるさと歴史の広場1997『埋蔵銭の物語―出土銭から見た中世の世界―』

上高津貝塚ふるさと歴史の広場2001『土浦の遺跡5　土浦の旧石器』

土浦市教育委員会2002『木田余台Ⅱ』

土浦市教育委員会2004『大宮前遺跡』

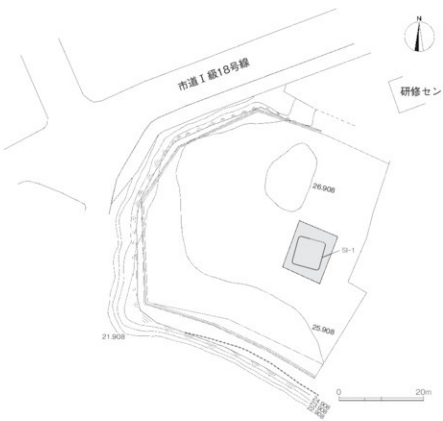
窪田恵一2006「土浦市木田余台遺跡群の旧石器時代～縄文時代草創期石器の研究」『土浦市立博物館紀要』第16号

上高津貝塚ふるさと歴史の広場2010『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第15号

第３節　発掘調査の経過

（１）調査区の設定

９月26日に実施した試掘調査（試掘率５％）をもとに、検出された竪穴住居跡の全面を確認するため、その住居跡を中心として約10m四方の表土を除去しこれを調査区とした。次いで本調査の実施に先立ち、前述の調査区の中に８ｍ×10mの大グリッドを設定して遣り方を組み、それを１m四方に分割したものを小グリッドとして発掘調査を実施した。なお、これらの調査区は工事の箇所に合わせて任意に設定したものであったため、国家座標及び方位等には合致していない。



第３図　調査区位置図

（２）調査日誌抄

昭和63年（1988）

10月３日　重機による表土の除去及び遺構の確認を行う。

４日　遺構の掘り下げを開始する。

５日　住居跡内より管玉未成品がまとまって出土する。

６日　未成品出土状況図を作成し、取り上げを行う。

７日　土層断面図を作成する。

８日　住居跡を全掘する。

11日　平面図等を作成し、調査を完了する。

第４節　発掘調査の概要

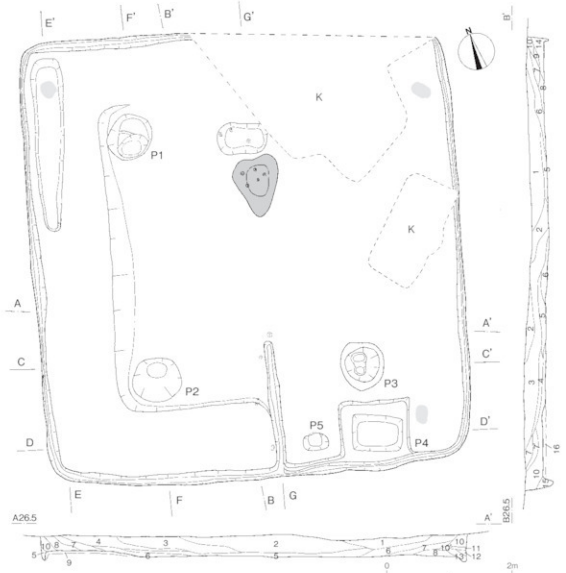
検出された遺構と遺物

竪穴住居跡〔SI-1〕（第４～７図　PL１～３）

規模・形態：主軸長約7.2m、幅約6.9m。面積約49.6㎡。住居跡北側の一部に２ヶ所の撹乱を受けている。

主軸方向：　N-３°-W

覆土：住居跡に堆積した覆土は14層に大別される。15層は壁溝の構築材に関連する層と思われ、16層はベッド状遺構の貼り床である。堆積土の特徴や堆積の状況から見て自然埋没と考えられる。

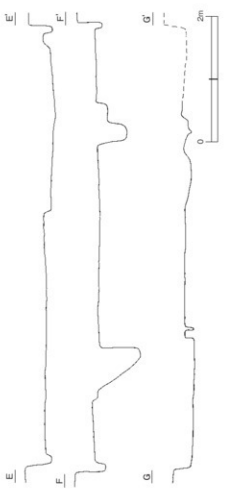


第４図　遺構（ＳＩ-１）平面・断面図

壁：撹乱による未確認部を除き、壁は急激に立ち上がっている。壁溝も撹乱による未確認部を除き全周している。壁溝は狭いところでは幅約10cm以下で、一部には壁際に設置してあった板状の構築材の

痕跡かと思われるものが確認できた。

床：撹乱による未確認部を除き、床面はよく踏み締められている。全体に中央部がやや窪み周囲にかけてやや高い形状をしていることから、周囲に貼り床がされていることが窺える。特に、西側及び南西側では主柱穴を結んだ線から内側においてL字状に明確なベッド状遺構となっている。住居跡床面には中央部に主柱穴３と炉跡１、南側に貯蔵穴１、ピット１、間仕切り溝１、西側において楕円形の浅い窪み１が確認された。また北東・北西・南東角部の３ヶ所に薄く焼土の堆積が見られたが、この部分の床面には焼けた痕跡は見られなかったので、この場所で火を焚いたのではなく住居廃絶時等に何らかの理由で焼土を置いたのではないかと思われる。



SI-1土層

1　褐色土　ロームブロックを多く含む
2　暗褐色土　ロームブロックを少量含む
3　褐色土　ロームブロックを少量含む
4　褐色土　ローム粒を多めに含む
5　暗褐色土
6　黒褐色土
7　暗褐色土　ローム塊を少量含む
7′　暗褐色土　7層に似るがローム塊を含まない
8　褐色土　ローム塊を多めに含む
9　褐色土　焼土・炭化物を多く含む
10　褐色土　ロームブロックを含む
10′　褐色土　9層に似るがロームブロックの含有がやや少ない
11　暗褐色土
12　褐色土　やや暗褐色土粒を含む
13　褐色土　ローム細粒を含む
14　褐色土　ローム粒を多めに含む
15　褐色土　締りややあり
16　暗褐色土　貼り床　締り非常に強い

第５図　遺構（ＳＩ－１）エレベーション図

炉：中央部やや北寄りに確認された。南北約90cm×東西約60cm、深さ約５cmの隅丸三角形状を呈する。底部には径約10cm程度の小ピットが複数確認できた。北側に隣接して南北約50cm×東西約90cmの不整楕円形の浅い窪みが存在している。

柱穴：Ｐ１～３が主柱穴である。北東側の主柱穴については撹乱を受けた範囲の中に存在していたと思われるが確認できない。各ピットとも上面径では約70～90cmで底面に行くほど径が小さくなり、柱は廃絶時に抜き取られた可能性が想定される。なお、Ｐ３については底面に小凹が２ヶ所あるので、

この部分については使用時に柱の建て替えが行われていた可能性もある。

貯蔵穴（Ｐ４）：南端部で検出されたもので、南側は住居跡南壁溝と接している。形態は長方形で、約10cmの段を有する２段掘り込みとなっている。規模は上段では約110cm×90cm、下段では約80 cm×60cm、底面では約65cm×40cm、深さは床面から約50cmである。本貯蔵穴内の覆土中から土師器の小片計42ｇ及び土玉１点と、少量の炭化物が検出された。また底面には少量ではあるがきめの細かい土の堆積が確認できた。本遺構の西側にピットと周仕切り溝が並んでいる。

ピット（Ｐ５）：南側壁際の貯蔵穴と周仕切り溝の間で検出されたもので、東西約40cm×南北約30cm、深さ約50cmの楕円形のピットである。穴は壁側である南側から内側に当たる北側に向けて斜めに掘られていることから、出入口に伴う階段（梯子）状の施設が設置されていた痕跡である可能性が考えられる。

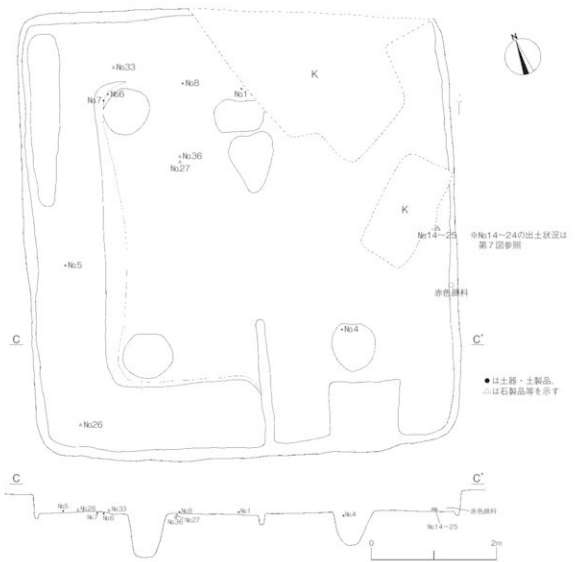
周仕切り溝：南側壁際中央部から北側にかけて伸びている長さ約200cm×幅約15cm、深さ約15cmの細い溝である。南端は壁溝とつながり、北側は主柱穴を結ぶラインより内側に入ったところで止まっている。なお、西側から延びるベッド状遺構は本溝で止まっており、何らかの関係性が窺われる。また本遺構の北端に１ヶ所、西側に４ヶ所径約10cmの小ピットが検出されており、周仕切りを支えた支柱のようなものが存在していた可能性がある。

その他の施設：西北角部からも西側壁際にかけて、長軸約280cm×幅約50cm～25cm、深さ約10cmの長楕円形の窪みが検出された。本遺構の西北側上面に焼土の堆積が見られたが、レベル的に本遺構に伴うものではなく、埋め戻された後に焼土が置かれたものと考えられる。本遺構の性格は不明である。

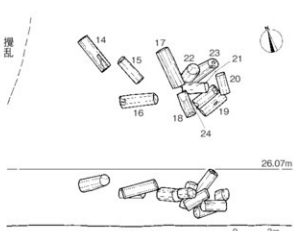
遺物出土状況：本住居跡内で発見されたのは土師器計約３kgである。発見された土器は破片ばかりで床面でも完存品が１点も存在せず、いわば清掃された残りのような状況であった。そのうち遺存状況の良い５点（壺１・台付甕１・高杯１・甕１・手づくね土器１：№1～５）と土製品８点（土玉６・紡錘車２：№6～13）を図示した。なお、住居跡東南側壁際で赤色顔料が少量確認できた場所があった。

玉作関係遺物出土状況：本住居跡内で発見された玉作関係遺物は23点（管玉未成品19・荒割未成品１・剥片３：№14～36）である。管玉未成品のうち17点（№14～25及び確認トレンチ出土№28～32）は東壁中央部の壁際付近よりまとまって出土している。その他の未成品は住居跡北西角付近で１点（№33）、南西角付近で１点（№26）と中央部で１点（№27）出土している。また中央部では砥石の可能性も想定される片岩の小片も出土したが、風化が進んでおり取り上げることはできなかった。

時期：出土した土器の特徴から、本竪穴住居跡は古墳時代前期頃のものと考えられる。



第６図　ＳＩ－１遺物出土状況図

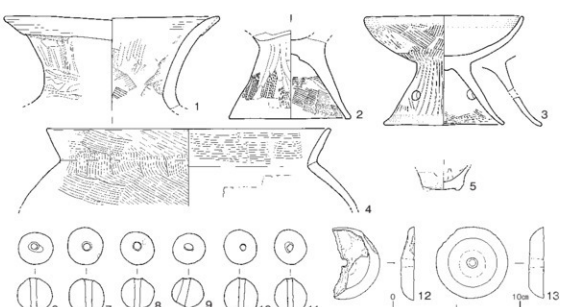


第７図　ＳＩ－１管玉未成品出土状況図

出土遺物（第８～10図　PL４～７）

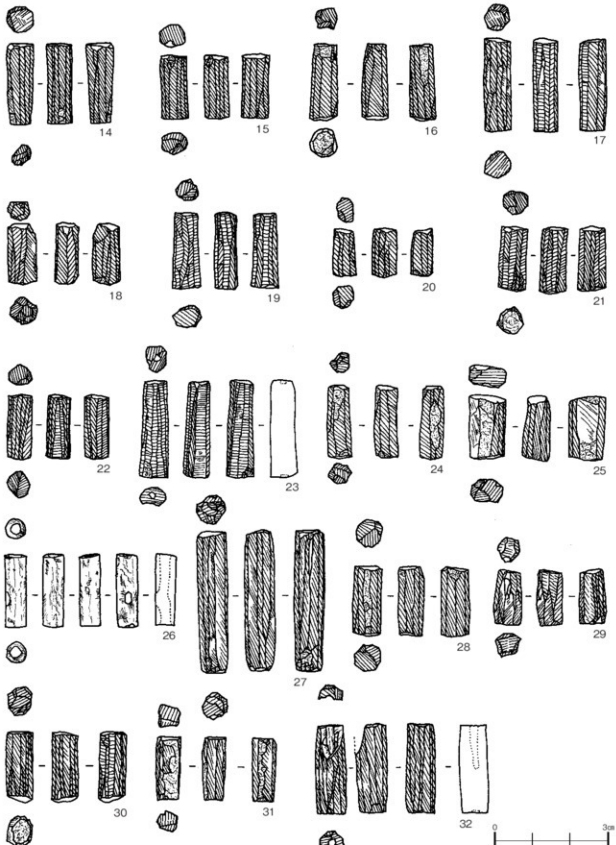
本竪穴住居跡からは土師器、土製品、滑石製管玉未成品等が出土した。

実測した土師器は５点である。うち２点は確認トレンチからの出土であるため、正確な位置は不明である。１は炉跡北側の床面から出土した壺である。口縁は貼り付けの複合口縁で、刷毛目状工具による弱い横ナデが施されている。頸部は刷毛目の後に上位に縦、下位に横のミガキで刷毛目を消している。２は遺構確認時に掘削したA区内のサブトレンチより出土した台付甕の脚部である。端部は面取りされている。調整は下位に横ナデ、次に中位に粗い刷毛目、最後に上位にミガキを施している。内面は刷毛目調整である。３も２と同じ確認サブトレンチ内より出土した高坏である。裾部はやや開き、脚部中央は若干膨らみを持つ。坏部は内彎しながら立ち上がる。調整は粗い刷毛目の後、口縁と裾部に横ナデを施している。内面は坏部にナデ､脚部は粗い刷毛目が施されている。透孔は４ヶ所で、不規則に穿孔されている。５はＰ１の北側の床面から出土した手づくね土器である。底部端に小突起が２ヶ所（内１ヶ所は痕跡）認められる。内外とも爪の跡が見られ、特に内面で顕著である。他に球状土錘６点（６～11）が、住居跡床面より３点、貯蔵穴内より１点、覆土中より２点出土している。土製紡錘車２点（12・13）については別個体として図化したが、薄い粘土板を貼り合わせて形を作っていたものが中央から剥離して２枚になった可能性もある。この紡錘車は玉作に関係する舞錐の一部である可能性も考えられるが、古墳時代の通常の紡錘車とは調整方法が異なることや、攪乱中の出土であるため判断は難しい。

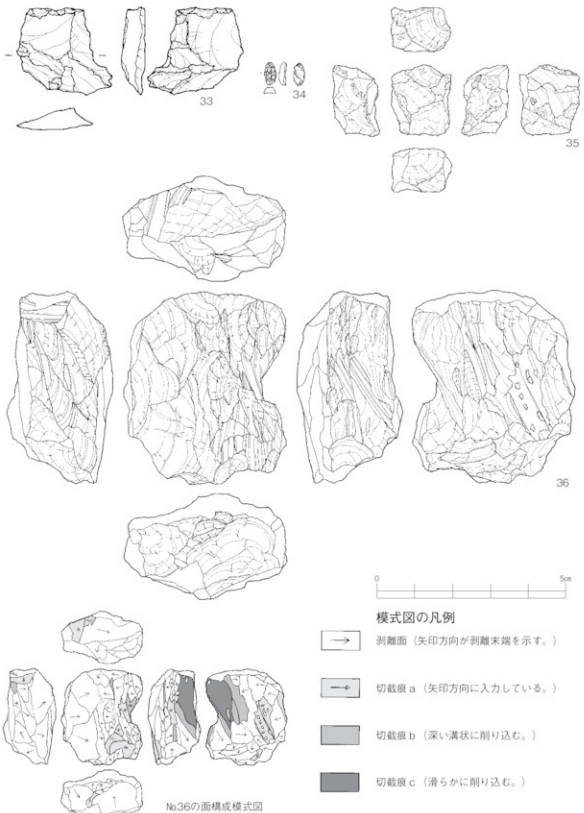


第８図　ＳＩ-１出土遺物（１）土器・土製品

石製品他としては、まず滑石製管玉未成品が19点出土した。うち16点が研磨未成品、穿孔未成品が２点、仕上工程（完成品？）が１点である。14～25は住居跡の南東、床面に近い地点から第７図のようにまとまって出土したものである（内１点は図化する前に動いてしまったため図化は11点としてい



第９図　ＳＩ－１出土遺物（２）管玉未成品



第10図　ＳＩ－１出土遺物（３）石製品等

る)。23は穿孔途中の段階で二方向穿孔、孔の深さは両方とも0.1cmである。他の11点は穿孔前の研磨の段階である。なお28～32は確認トレンチからの出土であるが、発見場所は14～25のすぐ近くである。28～31は穿孔前の研磨の段階、32は穿孔の途中で破損した未成品で、二方向穿孔の孔の深さは0.15cm、0.1cmである。26は住居跡南西の角部付近で出土したもので、孔は貫通しているが、仕上げの研磨の段階で破損したと思われる。27は今回出土した中で最も長く全長3.8cmを図る。なお16、21、31については片側端面に周囲から0.1cmほど溝状に擦り切った上で折り取った痕跡が確認できる。このうち16と21についてはその折り取った部分で接合することが観察できるので、本来は長さ3.8cmの１本の未成品であったことが確認できた。33、34は滑石の剥片である。34についてはやや色調に変化があるので熱を受けている可能性がある。35は全面がネガ（凹）面の剥離面で覆われたサイコロ状で、角部の一部には敲打痕があり「角潰し」が施されている。長軸長が約２cmと管玉未成品の長さに近い。以上の検討から形割未成品の可能性も考えられる。36はやや大きめで不整形の滑石材である。周縁から中心に向かう求芯状の剥離面で覆い、中心部が長軸方向に平行して厚みがある両凸レンズ状となる。正面図右側面に浅く抉り部が形成されているが、この部位には剥離面と共に切截痕ａ～ｃが集中する。切截痕ａは器面と並行する様に削っている。切截痕ｂは器面に対して直交する様に刃を立てて器体内部へ深く溝状に削り込みを施している。中には凸丸刃工具の刃先形状がそのまま残る箇所もある。切截痕ｃは切截痕ａと同様に器体に平行して削り込むが、工具の当て幅を小さくして多数の削り面を並行施工させ滑らかな凸面を成形しようとする意図が窺える。その他の側面には切截痕ａが角部を中心に散見される。以上の観点から見れば、何らかの意図を持って荒割りから形割り・削り出しを行い、何かを作りだそうとしている途中のように思える。現状の形態は勾玉に似るが、古墳時代前期にこのような大型の滑石質勾玉が存在する類例は未確認である。このほかにＣ区で発見された管玉未成品の脇で、砥石の可能性も想定される約５cm×2.3cm雲母片岩系の小石材１点が発見されたが、非常に劣化しており取り上げることはできなかった。

なお、これらの他に覆土中に少量ではあるが縄文土器片なども混入しているので、近隣に他の時代の遺構が存在する可能性も想定される。

第２表　出土遺物観察表

（１）土器・土製品

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置・ 残存率・ 焼成	胎土	色調	器形の特徴	整形	備考 遺物注記
1	土師器 壺	A：〔16.8〕 B：(7.6) C：-	床面 10% 普通	白色砂粒 多	にぶい黄褐 色	口縁は貼り 付けの複合 口縁で強く 外反	外面：口縁横ナデ（刷毛状）頸部刷毛目→ミガキ 内面：口縁横ナデ頸部刷毛目→ミガキ	口縁部のみ 334ｇ 浅西No.1
2	土師器 台付甕	A：- B：(7.0) C：9.7	覆土 10% 普通	白色砂粒 多・３㎜ 大の石少	にぶい橙		外面：横ナデ（下）→刷毛目（中）→ミガキ 内面：刷毛目、頭ナデ	脚部のみ 201ｇ 確サブトレ

3	土師器 高杯	A：〔12.4〕 B：8.6 C：〔9.5〕	覆土 70% 普通	白色砂粒 多・2㎜ の石少	にぶい橙	口縁は内彎しながら立ち上がる。 透孔４ヶ所	外面：刷毛目→横ナデ(口縁・裾) 内面：杯部横ナデ脚部刷毛目、指ナデ	口縁・脚部一部欠 174ｇ 確サブトレ
4	土師器 甕	A：〔25.4〕 B：(5.5) C：-	床面 ５% 普通	白色砂粒 多・１～２㎜の石含	外面：にぶい橙 内面：にぶい褐色		外面：刷毛目 内面：口縁刷毛目胴部ヘラナデ	口縁破片 90ｇ 浅西№７
5	土師器 手づくね	A：- B：(1.8) C：2.9	床面 80% 普通	白色砂粒 小石少	にぶい黄橙	底部端に２ヶ所の小突起を持つ	内外ナデ爪の痕あり	口縁部欠 18ｇ 浅西№５
6	土錘	径2.3～2.5 孔径0.5	床面 100% 普通		にぶい橙	球状	ナデ	17.3ｇ 浅西№３
7	土錘	径2.8～2.9 孔径0.6	床面 100% 普通	白色砂粒	にぶい橙	球状	ナデ	吸炭有 20.5ｇ 浅西№４
8	土錘	径2.6～2.4 孔径0.6	床面 100% 普通	白色砂粒	黒	球状	ナデ	全面吸炭 14.1ｇ 浅西№８
9	土錘	径2.5～2.6 孔 径0.5～0.6	貯蔵穴 100% 普通	白色砂粒	にぶい橙	球状	ナデ	14.0ｇ Ａ区土坑下層
10	土錘	径 2.86 ～3.1 孔径0.4	覆土 100% 普通	白色砂粒	黒	球状	ナデ	全面吸炭 19.8ｇ Ａ区フク土
11	土錘		覆土 100% 普通	白色砂粒	にぶい橙	球状	ナデ	Ｃ区フク土
12	土製紡錘車	A：〔3.8〕 B：1.0 C：〔5.6〕 孔径0.6	攪乱 50% 普通	白色砂粒	黒		上面・側面：丁寧なナデ 底面：無調整 №13と接合	全面吸炭 18.2ｇ Ｄ区カクラン
13	土製紡錘車	A：3.8 B：1.1 C：5.6 孔径0.7	攪乱 100% 普通	白色砂粒	黒		上面・側面：丁寧なナデ 底面:無調整 №12と接合	全面吸炭 37.1ｇ Ｄ区カクラン

（2）石製品等

No.	種別	長さ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土位置	石材	色調	備考 遺物注記
14	管玉研磨工程	2.1	0.7	2.1	床上	滑石	暗緑灰	D区No.1
15	管玉研磨工程	1.6	0.7	1.6	床上	滑石	暗緑灰	D区No.2
16	管玉研磨工程	2.0	0.7	2.0	床上	滑石	暗緑灰	端面片側に切截痕有 D区No.8（実測図21）と接合　D区No.3
17	管玉研磨工程	2.4	0.7	2.5	床上	滑石	暗緑灰	D区No.4
18	管玉研磨工程	1.7	0.7	1.6	床上	滑石	暗青灰	D区No.5
19	管玉研磨工程	2.0	0.8	1.8	床上	滑石	暗青灰	D区No.6
20	管玉研磨工程	1.3	0.7	1.0	床上	滑石	暗青灰	D区No.7
21	管玉研磨工程	1.8	0.7	1.8	床上	滑石	暗青灰	端面片側に切截痕有　D区No.3（実測図16）と接合　D区No.8
22	管玉研磨工程	1.7	0.6	1.6	床上	滑石	暗青灰	D区No.9
23	管玉穿孔工程	2.6	0.7	2.6	床上	滑石	暗青灰	二方向穿孔　口径0.2，0.1 D区No.10
24	管玉研磨工程	1.9	0.6	1.4	床上	滑石	暗青灰	D区No.11
25	管玉研磨工程	1.7	0.9	2.3	床上	滑石	緑灰	D区No.12 （出土状況図作成前に動いてしまったため図には表記していない）
26	管玉仕上工程（完成品？）	1.9	0.5	1.0	B区床面	滑石	青黒	側面中央に穿孔時の屈折により生じた孔が仕上げ研磨により表出 二方向穿孔　口径0.3，0.3 B区床直
27	管玉研磨工程	3.8	0.8	4.5	C区床面	滑石	暗青灰	C区未成品
28	管玉研磨工程	1.8	0.7	1.8	試掘確認トレンチ	滑石	暗青灰	浅西D区
29	管玉研磨工程	1.5	0.7	1.2	試掘確認トレンチ	滑石	暗緑灰	浅西D区
30	管玉研磨工程	1.9	0.8	1.3	試掘確認トレンチ	滑石	暗緑灰	浅西D区
31	管玉研磨工程	1.7	0.6	2.1	試掘確認トレンチ	滑石	暗青灰	端面片側に切截痕　浅西D区
32	管玉穿孔工程	2.4	0.7	2.6	試掘確認トレンチ	滑石	暗青灰	二方向穿孔、口径0.2，0.2　浅西D区
33	剥片	2.35	0.6	3.1	覆土	滑石質材	暗緑灰	C区ハク片
34	剥片	0.12	0.4	0.1	覆土	滑石質材	暗緑灰	被熱？浅西No.9
35	剥片（管玉形割工程？）	0.89	1.21	4.7	覆土	滑石質材	暗緑灰	D区フク土
36	形割未成品？	5.15	4.31	76.4	床上	滑石	暗緑灰	切截痕３ヶ所　形割から削出工程に入る　浅西No.2

第５節　考察

１．本遺跡で検出された玉作工房跡について

今回の調査で確認されたのは竪穴住居跡１軒であるが、出土品中に滑石製管玉未成品が多数見られることや、ベッド状遺構、間仕切り、貯蔵穴などを備えた形態などから、玉作工房跡であったものと考えられる。現在土浦市内では南部の烏山遺跡や東部の八幡脇遺跡においても玉作工房跡と考えられる竪穴住居跡が確認されていることから、それらと本住居跡の規模・形態・出土品の傾向を比較してみたい。

第３表　土浦市内検出玉作工房跡の規模

遺跡名	遺構名	長さ×幅（m）	面積（㎡）	住居内施設	玉作関連遺物
烏山遺跡	A-3	4.8×6.0	28.8	柱穴	碧玉質管玉未成品２、滑石製勾玉未成品２
	A-10	4.0×3.5	14.0	柱穴	碧玉質管玉未成品３、メノウ製勾玉未成品５、砥石１
	A-18	4.4×－	－	柱穴・ピット	碧玉質剥片・管玉未成品等74、滑石製剥片・管玉未成品等50、メノウ製剥片・勾玉未成品69、砥石３（絹雲母片岩２・砂岩１）
	A-20	4.4×3.6	15.8	柱穴	碧玉質管玉未成品等34、滑石製管玉・勾玉未成品等56、メノウ製剥片・勾玉未成品１、砥石１（絹雲母片岩）
	A-28	6.1×6.0	36.6	柱穴・ピット・貯蔵穴	碧玉質剥片・管玉未成品７、滑石製管玉未成品１、メノウ製勾玉未成品１
	A-29	6.9×6.5	44.8	カマド・柱穴・貯蔵穴１	碧玉質剥片２、滑石製勾玉・臼玉未成品等３、メノウ製勾玉未成品等６
	A-34	4.6×4.0	18.4	柱穴	碧玉質管玉未成品３、滑石製管玉未成品８、メノウ製勾玉未成品11
	A-57	6.2×6.2	38.4	柱穴・貯蔵穴・ピット	碧玉質剥片・管玉未成品等194、滑石製原石・剥片・管玉・勾玉未成品等214、メノウ製勾玉未成品41、砥石７（絹雲母片岩）
八幡脇遺跡	４号	4.1×4.0	16.4	炉２・貯蔵穴１	メノウ製勾玉未成品６、砥石（片岩）４、石製工具４
	６号	8.0×8.0	64	柱穴・炉・ベッド状遺構・貯蔵穴・間仕切り溝・入口施設・ピット	メノウ製原石・勾玉未成品等31、滑石製勾玉・管玉未成品等４、緑色凝灰岩、コハク剥片、砥石（片岩）10
	８号	4.5×4.5	20.3	柱穴、炉・ベッド状遺構・貯蔵穴・間仕切溝・入口施設	メノウ製剥片・勾玉未成品11、緑色凝灰岩・凝灰岩製剥片・管玉未成品14、砥石（片岩・凝灰岩等）６、石製工具３、コハク剥片等
浅間塚西遺跡	SI-1	7.2×6.9	49.6	柱穴、炉・ベッド状遺構・貯蔵穴・間仕切溝・入口施設	滑石製管玉未成品22・形割未成品？・剥片、砥石？１

こうしてみると、本遺跡で発見された住居跡は八幡脇遺跡第６号住居跡に次ぐ大きさであり、土浦市内で確認されている玉作工房跡の中では比較的大型の部類に属するものであることが窺われる。またベッド状遺構や貯蔵穴などの諸施設を備えている点にも八幡脇遺跡第６号住居跡と類似点があるが、細かく見ればベッド状遺構や間仕切り溝の設置状況、工作用ピットと思われる小さなピットの設置状況などに差異が見られる。なお、鳥山遺跡・八幡脇遺跡とも材料は碧玉質（緑色凝灰岩）・メノウ・滑石を使用し、勾玉・管玉の玉作を行っているのに対し、本遺跡で使用している石材は滑石のみであり、管玉の製作だけである点も大きな違いである。

２．本遺跡出土資料から見た管玉製作工程の特徴について

本遺跡から出土している滑石質管玉未成品は、形割未成品？１点と管玉仕上未成（完成品？）１点を除く残り18点は管玉研磨・穿孔未成品である。いわば荒割～切削までの工程はどこか他で行った上で、その後２次製品としての研磨未成品を本住居跡へ運び入れ、その先の仕上げ工程までを分業化して行っていた感を受ける（註１）。

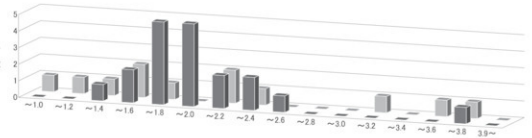
なお、本遺跡から出土している滑石製管玉未成品の寸法を検討すると、直径0.7cm前後、長さ1.7～2.1cmに分布が集中していることが分かる。特に長さが２cm弱に集中しているところに、本遺跡の滑石製管玉製作に関する長さの指向性を垣間見ることができる（註２）。

さて、そこで問題となるのが、№27という長さ3.8cmと他の資料の約２倍の長さを持つ未成品が存在している点である。そこで改めて今回の資料を見直してみたところ、№16・21・31の３点については片端に擦り切った後に折り取ったと思われる切截痕があり、このうち№16と21については切截部分で接合することが分かった（PL.６参照）。この接合関係にあるものを復元した場合の長さも3.8cmである。このことから推定すると、本遺跡出土の管玉については荒割・形割工程によって管玉の素形をつくり、次に切削工程・研磨工程によって長さ２cm前後の多角柱状に仕上げているものの、一部のものについては長さ４cm程度の研磨未成品に一度整えた後に、中央で切截して長さ約２cmの研磨未成品に再調整していることが考えられる。そしてその後に全体で穿孔工程、仕上げに移っていった可能性が想起される。

それにしてもなぜ当初から２cm前後の短い管玉未成品とせずに、一度長い状態の未成品を製作したのちに半分にして短い未成品としているのであろうか。この製作技法はすべての管玉未成品に見られるわけではなく一部の未成品にだけ見られることから考えれば、すべてにおいて長い研磨未成品を作った後に二分割する工程が採られていたわけではなく、当初から長さ２cm前後の研磨未成品として製作するものと、倍の長さで研磨未成品を作り、その後２分割して長さをそろえたものの２種類の作り方が同時に存在していたことが分かる。

このような製作技法が採用されている理由はよくわからないが、考えられそうなこととしては、形割・切削工程で長い未成品を無理に２分割すると全体が破砕してしまうおそれがあるのに対し、研磨後に切截して２分割するのであれば比較的失敗が少ないであろうと思われることである。また切削後に２分割すると研磨工程も２個分行うしかないが、長い１個の状態で研磨しその後２分割すれば、２個分の研磨が１回でできることも理由として考えられる。これらのことから更に類推すれば、最終的に２cm前後の管玉として揃えることを念頭に置きながら製作を進めるにあたり、形割工程終了時に長

さ2cm前後となったものはそのまま切削・研磨工程に進むものの、長さが4cm前後の未成品となりそうなものはその段階では長さを揃えず、研磨後に2分割することを予定して作業を進めていたのではないかと思われる（註3）。資料が少なく不明な点が多いが、今回は資料の提示に留め、今後の類例の増加・研究成果を期待したい。



	～1.0	～1.2	～1.4	～1.6	～1.8	～2.0	～2.2	～2.4	～2.6	～2.8	～3.0	～3.2	～3.4	～3.6	～3.8	3.9～
■浅間塚西遺跡SI－1	0	0	1	2	5	5	2	2	1	0	0	0	0	0	1	0
■烏山遺跡A－57	1	1	1	2	1	0	2	1	0	0	0	1	0	1	1	0

第11図　浅間塚西遺跡SI-1、烏山遺跡A-57号住居跡出土管玉未成品の傾向

※破線は本遺跡では未確認の資料を、〔 〕は烏山遺跡等の滑石質管玉製作工程では見られないが、本遺跡では存在が想定される工程を示す
No.は第9・10図の遺物番号を参照

第12図　浅間塚西遺跡出土資料から想定される管玉製作工程

（註1）玉作工程における分業化の件については、八幡脇遺跡でも6号住では側面打製工程や研磨工程の未成品が目立ち、8号住では荒割り～研磨工程が目立つなど、分業化を想定できる資料が出土している。

（註2）本遺跡出土未成品19点の平均長は1.99cmである。なお烏山遺跡A-57号住居跡出土滑石製管玉未成品12点の平均長も2.08cmで長さの傾向は類似しているが、本遺跡出土資料に比べると2cmよりも長いものと短いものが多く、ばらつきが大きい。なお烏山遺跡において2cm前後のものが少ない理由としては、他の場所で次の加工を行うために運び出されている可能性も考えられる。第11図参照。

（註3）烏山遺跡A-57号住居跡出土の滑石製管玉未成品も大別すると2cm以下の短いものと3cm強の2種類があるので、同様の方法が採られていた可能性も考えられる。

※なお、八幡脇遺跡の詳細については、土浦市遺跡調査会2009『八幡脇遺跡―田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集―』土浦市教育委員会を、烏山遺跡の詳細については大川清・寺村光晴1988『茨城県土浦市・烏山遺跡』土浦市教育委員会を参照。

第Ⅱ章　房谷遺跡

第１節　調査に至る経緯

平成元年（1989）７月に、開発者の社会福祉法人祥風会理事長羽鳥嘉雄氏より、土浦市に対して、小松３丁目730-１他において特別養護老人ホーム新築工事（3,235㎡）に伴う事前協議申出書が提出された。土浦市教育委員会では協議に伴い現地を確認したところ、当該地のうち山林部分については遺跡の有無が確認できないので試掘調査を行う必要があると回答した。そのため事業者の協力のもと11月29日に試掘調査を実施したところ、竪穴住居跡１軒が検出されたため、翌30日付けで文化財保護法第57条の５第１項に伴う房谷遺跡の遺跡発見届を文化庁に提出した。また遺跡の保護についても並行して協議が行われたが、遺跡の発見された部分は全体計画の中で切土対象地であり遺跡の場所を保存することは不可能であったため、発掘調査による記録保存を行うこととなった、そのため12月１日付で文化財保護法第98条の２第１項１に基づく埋蔵文化財発掘調査通知を提出し、翌年１月17日から発掘調査を実施した。

第13図　調査場所位置図

第２節　遺跡の環境

房谷遺跡（145）は桜川南岸・霞ヶ浦西岸の筑波稲敷台地の標高約24mの台地上に存在する。遺跡の存在する場所は南東の霞ヶ浦から侵入する谷津の最奥部に当たり、東・南側が谷津に囲まれた小舌状台地上である。周囲は桜川・霞ヶ浦・花室川につながる谷津が大変発達した地形であり、本来谷津を生産基盤としていた古代の人々にとって暮らしやすい場所であったと思われるが、残念ながらこの辺りは土浦市内でも比較的古くから住宅地開発が進んでいた場所であるため、房谷遺跡の近隣では現在確認されている遺跡の数は多くはない。

まず旧石器時代であるが、六十原Ａ遺跡（151）、池の台遺跡（094）などにおいて旧石器が確認されている。六十原Ａ遺跡については約13,000年前の年代が想定されている。

縄文時代については、早期の土器が内根Ａ遺跡（105）、東谷遺跡（085）において確認されている。中期では霞ヶ岡遺跡（083）、霞ヶ岡北遺跡（084）、池の台遺跡、国分遺跡（095）、内根Ｂ遺跡（106）

などで土器片が確認されているほか、六十原遺跡（149：1993年調査）・六十原Ａ遺跡（1995年調査）において、２遺跡合わせて竪穴住居跡19軒、フラスコ土坑197基などが確認されており、大規模な集落が存在していたことが窺われる。後期には、江見水蔭の『探検実記地中の秘密』において上高津貝塚とともに紹介された小松貝塚（155）がある。小松貝塚は明治時代後期の常磐線建設時に破壊されたと思われていたが、1991年（平成２）に縄文時代後期～晩期の貝廃棄土坑などが多数検出され、失われていたと思われていた小松貝塚がまだ存在していたことが明らかとなった。また内根Ｂ遺跡、木曽北遺跡（110）においても土器片が採集されている。

ただし、弥生時代についてはこの周囲で確認されている明確な遺跡は少なく、内根Ａ遺跡において弥生時代後期のものと思われる土器片が採集されているのみである。

古墳時代になると比較的遺跡の展開が進み、本遺跡の他に霞ヶ岡遺跡、霞ヶ岡北遺跡、東谷遺跡、小松遺跡（093）、池の台遺跡、内根Ａ遺跡、内根Ｂ遺跡、木曽北遺跡などに集落が形成されていたと思われる。ただしその大半は古墳時代後期のものであり、時期による遺跡の濃密さに差があるのが特徴である。特筆すべきものとしては東谷遺跡（1990年調査）において、古墳時代前期の北陸系の土器が確認されている。また池の台遺跡（1979年調査）では古墳時代後期～奈良平安時代の竪穴住居跡31軒などが調査されている。また古墳については桜ヶ丘古墳（092）、霞ヶ岡古墳（086）、ひさご塚古墳（108）、三芳古墳（159）などで確認されているが、いずれも単独墳で現在のところ大規模な古墳群などは確認されていない。三芳古墳（1997年一部調査）は、径34m、高さ3.3mの円墳と推定され、出土した埴輪、土師器などから古墳時代中期に築造された古墳と考えられている。またひさご塚古墳は現在後円部径約20m、高さ３ｍを残す前方後円墳であるが、形象埴輪（馬）の破片が採集されており、古墳時代後期に築造された古墳と考えられている。

奈良・平安時代については、前述の池の台遺跡のほか、霞ヶ岡遺跡、霞ヶ岡北遺跡、小松遺跡、内根Ａ遺跡、内根Ｂ遺跡、内根Ｃ遺跡（107）、木曽遺跡などに土器片の散布が確認されており、集落の存在が推定される。

中・近世の遺跡としては、土坑や溝が確認された霞ヶ岡遺跡（1996年一部調査）や、近隣に館跡の存在が推定される木曽北遺跡・大岩田貝塚（146）などがある。また、小松３丁目の二十三夜尊に収められている木造阿弥陀如来立像・木造薬師如来坐像及び両脇侍像（どちらも市指定文化財）は鎌倉時代の作と思われる優品であり、当時代における地域の繁栄を示す好資料である。

第14図　周辺の遺跡

第４表　遺跡対象表（房谷遺跡）

番号	遺跡名	番号	遺跡名
145	房谷遺跡【今回調査】	106	内根Ｂ遺跡
083	霞ヶ岡遺跡	107	内根Ｃ遺跡
084	霞ヶ岡北遺跡	108	ひさご塚古墳
085	東谷遺跡	109	木曽遺跡
086	霞ヶ岡古墳	110	木曽北遺跡
092	桜ヶ丘古墳	146	大岩田貝塚
093	小松遺跡	149	六十原遺跡
094	池の台遺跡	151	六十原Ａ遺跡
095	国分遺跡	155	小松貝塚
105	内根Ａ遺跡	159	三芳古墳

参考文献

江見水蔭1909『探検実記地中の秘密』

土浦市史編さん委員会1975『土浦市史』

汀安衛1981『池の台遺跡発掘調査報告書』

土浦市教育委員会1984『土浦の遺跡』

茨城県教育委員会1993『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅶ』

茨城県教育委員会1995『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅷ』

土浦市教育委員会1996『六十原Ａ遺跡』

上高津貝塚ふるさと歴史の広場1998『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第3号

土浦市教育委員会1998『三芳古墳・東谷遺跡２次』

上高津貝塚ふるさと歴史の広場2000『上高津貝塚ふるさと歴史の広場常設展示図録』

上高津貝塚ふるさと歴史の広場2001『土浦の遺跡５　土浦の旧石器』

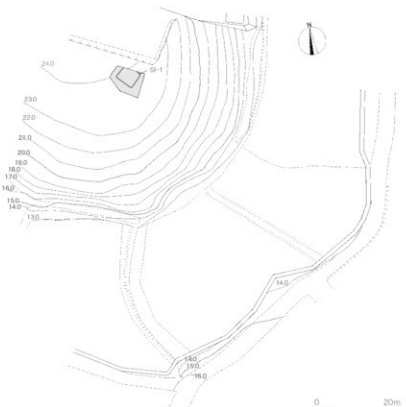
土浦市教育委員会2003『六十原遺跡』

土浦市教育委員会2009『土浦の文化財』

第３節　発掘調査の経過

（1）調査区の設定

平成元年11月29日の試掘調査で遺構が確認された場所を中心に東西約7.5m×南北約７mの範囲の表土を重機によって除去し、調査区とした。北側については隣接地との安全範囲を確保したため、確認された住居跡の全体を露出させることができなかった。



第15図　調査区位置図

（2）調査日誌抄

平成２年（1990）

１月17日　調査開始・機械による表土除去実施。

18日　遺構確認・掘削開始。

19日　降雪により作業中止。

22日　覆土・床面より遺物が出土。

23日　土層断面図作成。

24日　遺物出土状況図作成。

25日　遺構完掘。

26日　完掘状況写真撮影・図化を行い、発掘作業を終了する。

第４節　発掘調査の概要

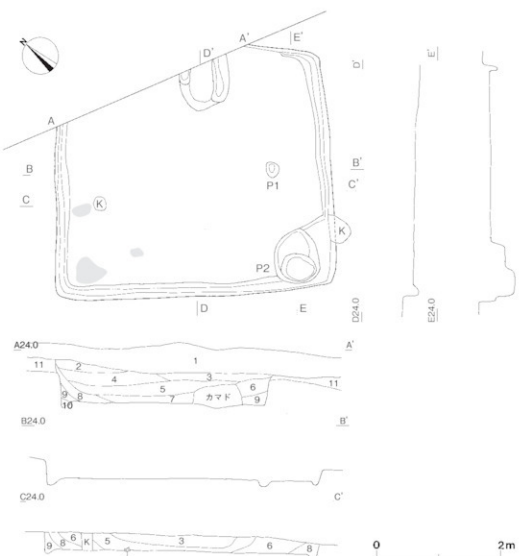
検出された遺構と遺物

竪穴住居跡〔SI-1〕（第16～18図　PL.7）

規模・形態：主軸長約４m、幅約4.4m。面積約17.6㎡。住居跡北側角部は調査区外となっている。また南角付近に小規模な撹乱を受けている。

主軸方向：　N-50°-E（東カマド）

覆土：住居跡に堆積した覆土は９層より構成され、自然埋没と考えられる。住居跡北側調査区際の土層断面（B－B´）を見ると、本来ローム層の上に褐色の自然堆積土（11層）があり、住居はその上から掘り込んでいたことが分かる。



第16図　遺構（ＳＩ－１）平面・断面図

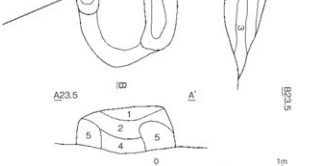
SI-1土層

1	表　土	褐色土	微量の砂を含む。粘性・締りは弱い。
2	遺構覆土	暗褐色土	粘性・締りは弱い。
3	遺構覆土	黒褐色土	褐色土粒を多く含む。粘性・締りは弱い
4	遺構覆土	暗褐色土	褐色土粒と黒褐色土粒をまだらに含む。粘性は弱いが締りは少しある。
5	遺構覆土	暗褐色土	ローム粒をやや多め、褐色土粒と黒褐色土粒をまだらに含む。粘性は弱いが締りは少しある。
6	遺構覆土	褐色土	ローム粒を多めに含む。粘性・締りともややあり。
7	遺構覆土	褐色土	ローム粒をやや多め、焼土粒を若干含む。粘性・締りともややあり。
8	遺構覆土	褐色土	ローム粒を多く含む。粘性・締りともややあり。
9	遺構覆土	黄褐色土	ローム粒・塊を多く含む。粘性・締りともややあり。
10	遺構覆土	黄褐色土	ローム塊を多く含む。粘性・締りともやや強い。
11	自然堆積土	褐色土	不純物を含まない。やや締りあり。

壁：北側角部の未確認部を除き、壁は急激に立ち上がっている。最も遺存が良い北角付近では壁は約65cmの高さがある。壁溝はカマドの無い南・西・北壁には回っているものの、カマドのある東壁では、カマドから向かって右側の壁溝は東角を超えてすぐに止まっている。このことから見てカマドの両袖付近については壁溝が回らないと思われる。壁溝の幅は約20～30cmである。

床：床面はよく踏み締められている。主軸方向ではほぼ水平であるが、幅方向ではやや北側が高い。住居跡床面には南側中央部壁寄りにピット１、南側角部に貯蔵穴１が確認された。また西角部に３ヶ所に薄い焼土の堆積が見られたが、この部分の床面には焼けた痕跡は見られなかったので、この場所で火を焚いたのではなく住居廃絶時等に何らかの理由で焼土を置いたのではないかと思われる。

カマド：東側壁際中央部に構築されたもので、煙道及び奥は調査区外となっている。長軸（推定）約１m短軸約80cmである。カマド燃焼部～焚き口部は５cmほど浅く皿状に窪んでいる。袖（５層）は住居壁面に接して左右に砂質白色粘土で構築されていたが、遺存状況はあまり良くない。２層も砂質白色粘土で構築されたカマドの天井崩落土と思われる。３・４層に焼土が多く含まれている。



カマド土層

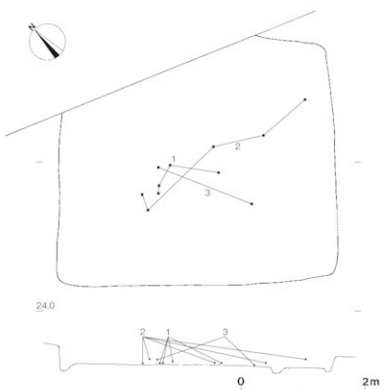
1. 覆土　灰褐色土　褐色土に灰白色土粒を含む。粘性・締りは弱い。
2. カマド構築土　灰白褐色土　灰白色土に褐色土粒を含む。粘性は弱いが締りはややある。
3. カマド内堆積土　赤褐色土　ローム粒を少量・焼土粒を多量に含む。粘性・締りは弱い。
4. カマド内堆積土　褐色土　ローム粒を少量・焼土粒をやや多めに含む。粘性・締りは弱い。
5. カマド構築土　灰白色土　カマド袖部。粘性は弱いが締りは強い。

第17図　ＳＩ－１カマド平面・断面図

ピット（Ｐ１）：上面径約25～20cm、床面からの深さ約10cmを測る。主柱穴の可能性も想定されるが、対応する位置には柱穴が確認されなかった。北側にあるものは撹乱である。

貯蔵穴（Ｐ２）：南端部で検出されたもので、南側は住居跡南壁溝と接している。形態は不整楕円形で、東側には約10cmの段を有する２段掘り込み形状となっている。規模は上段では約80cm×70cm、下段では約45cm×60cm、底面では約35cm×45cm、深さは床面から約35cmである。

遺物出土状況：本住居跡内で発見されたのは土師器等約４kg（実測遺物３点以外：0.75kg）である。発見された土器は破片が多く完存品は１点も存在しなかった。また出土状況も覆土～床面にかけて散在している状態のものが多く、流れ込みであるものと思われる。なお、これらの他に覆土中に少量ではあるが縄文土器片なども混入しているので、近隣に他の時代の遺構が存在する可能性も想定される。

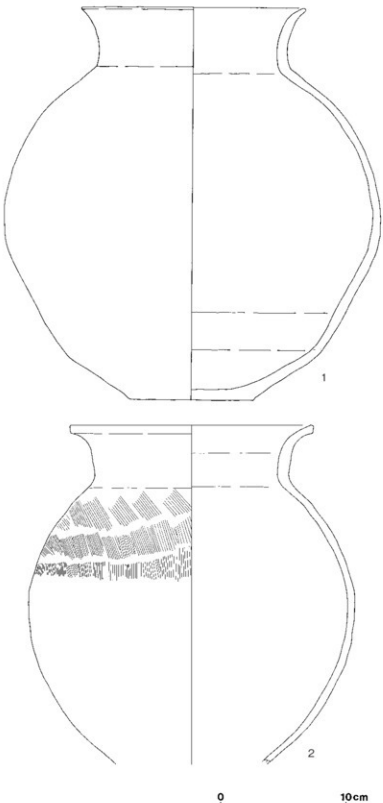


第18図　ＳＩ－１遺物出土状況

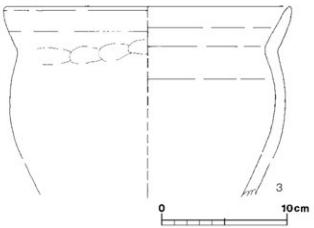
時期：住居にカマドが設置されていることや、出土した土器の特徴から、本竪穴住居跡は古墳時代後期頃のものと考えられる。

出土遺物（第19・20図　PL.8）

出土遺物の中から遺存状況の良い土師器甕３点（１～３）を図示した。



第19図　ＳＩ－１出土遺物（１）



第20図　ＳＩ－１出土遺物（２）

第５表　出土遺物観察表

図版No.	器種種類	法量（cm）	出土位置・残存率・焼成	胎土	色調	器形の特徴	整形	備考 遺物注記
1	土師器 甕	A：〔19.6〕 B：31.2 C：9.8	床面 50% 普通	白色砂粒やや多	橙色	口縁外反 胴部は丸め 製作時に体部下半で一度止めている	外面：口縁横ナデ体部ナデ 内面：口縁横ナデ体部ナデ	口縁～体部1/2欠 1.6kg（石膏含） ＫＦ-№3. 15.17.19.フク土
2	土師器 甕	A：〔19.0〕 B：〔27.0〕 C：-	床面～覆土 40% 普通	白色砂少量・微砂粒多め	明黄褐色	口縁外反、端部はやや厚めで角型 外面下半に煤付着	外面：口縁部横ナデ、体部上半刷毛・下半ナデ 内面：口縁部丁寧なナデ、体部ナデ	口縁～体部 1.25kg（石膏含） ＫＦ-№1.2.9. 11.13
3	土師器 小型甕	A：〔22.6〕 B：〔15.2〕 C：-	床面 10% やや不良	白色砂粒やや多め	にぶい黄橙色	口縁は直線的体部張り弱い 器厚は厚め	外面：口唇部横ナデ、口縁部粗いナデ、頸部に連続した指頭痕 内面：口縁部ナデ、体部ミガキ	口縁部～体部 400ｇ ＫＦ-№7.16

第５節　考察

房谷遺跡調査例から見た竪穴住居跡の土壁支持方法について

通常の茨城県内の発掘調査においては、表土が比較的薄く耕作などのために関東ローム層より上の土層が攪乱を受けていることが多いことや、関東ローム層を遺構確認面としてそれより上の土層を重機などにより除去してしまうことが多いため、関東ローム層より上の竪穴住居跡の壁の立ち上がりについて確認・調査できた事例が多くはない。今回部分的ではあるが、調査区際においてローム層より上の自然堆積土層（11層：褐色土）から掘り込まれた竪穴住居の壁を確認することができたため、床面から最大約65cmまでの高さで竪穴住居の壁の立ち上がりを観察することができた。

今回検出された住居の壁面を見ると、床から上に向かって一直線に立ち上がるわけではなく、床面から約45cm、丁度関東ローム層と褐色土の境目あたりで緩やかに一度外側にカーブした小さな段があり（註）、その後また上に向かっていることが分かる。このことから見ると、この辺りに何らかの壁構造に変化があったことが推測される。竪穴住居の壁は本来壁溝に渡した板材などよって住居内に土砂が崩落しないように抑えられているものと考えられているが、床面から上まで一様に支えられている訳ではなく、この辺りで壁板に継が入るなど、何らかの理由により壁の支え方を多少ではあるが変えていた可能性が考えられる。

このような手法を採った理由としては、比較的硬めなローム層に比べればその上の褐色土は粘性・締りともに弱く、ローム層と同様の壁構造（支持方法）では強度に不安があったことや、構造材（部材）の採り方・使い方などのために大型の一枚ものの壁とすることができず、途中で継を入れなければいけなかったことなどが想定される。

もちろん今回検出された壁も本来構築時の全ての高さとは言えないので、本来の竪穴住居構築時の掘り込みはもっと深かったものと推測され、このような段が他にも存在していた可能性も考えられる。

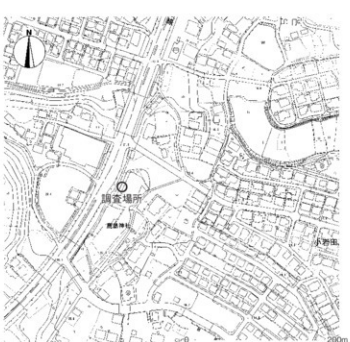
（註）古代の竪穴住居跡について、棚状施設が設置されている高さが床面から35～45cmのものが最も多く約34％を占めるという研究がある。この辺りの床面からの高さが当時の生活について利便性などで何らかの意味があったことも考えられる。桐生直彦1997「君は“棚”を見たか―武蔵国における棚状施設の事例分析―」『土壁』創刊号

房谷遺跡 SI-1 の掘込確認状況

第Ⅲ章　内出後遺跡（第１次調査）

第１節　調査に至る経緯

平成２年（1990）７月に、土浦市に小岩田東１丁目1233-１他に伴う開発行為に伴う事前協議申出書が提出された。土浦市教育委員会では遺跡台帳と照合したところ、当該地は内出後遺跡（当時県遺跡番号5250・市遺跡番号Ｂ-５：現遺跡番号087）が存在することが確認されたため、工事着手前には発掘調査が必要となる旨を事業者に回答した。８月になり当該地で工事が行われているとの情報が寄せられたため現地を確認したところ、現在行われている工事は前の申請者と異なる株式会社スギヤマ薬品に伴う店舗建築工事で、面積も縮小されていたため開発行為には該当しないものとなっていたことが分かった。そこで教育委員会では事業者であるスギヤマ薬品に対し、８月21日付けで当該地が遺跡であること及び同遺跡の取り扱いについて早急に協議したい旨を連絡し、８月29日に現地において市教委担当者と事業者代理として設計者であるエスケイ企画黒沢浩一氏と話し合いが行われた。その結果当該地は埋蔵文化財包蔵地であることから文化財保護法第57条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘届を提出していただくことと共に、遺跡の取り扱いについては店舗建築部分については基礎掘削部分が既に完了していること、その他の部分については盛り土保存とすること、建物前の駐車場部分については確認調査によって遺構が確認された場合は発掘調査を行うことなどで合意を得られた。そこで９月７日に確認調査についての協議を行い12日に確認調査を行ったところ、遺構が確認されたため、急ぎ調査体制を組織し、18日に文化財保護法第98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査通知を提出して発掘調査を開始した。



第21図　調査場所位置図

第２節　遺跡の環境

内出後遺跡（087）は筑波稲敷台地の花室川北岸標高約23mに存在する。遺跡の存在する場所は花室川を南に臨む台地上であり、遺跡の周囲は花室川から延びる谷津が大変発達した地形を呈している。そのため谷津を生産基盤としていた古代の人々にとって暮らしやすい場所であったと思われ、市内では比較的遺跡の分布が濃密な地域として知られている。なお、本遺跡の周囲は近年道路建設や住宅地開発などの開発事業が多い地域でもあり、これらの開発事業に伴い比較的多くの遺跡が調査されていることも特徴である。

まず旧石器時代であるが、県道荒川沖・木田余線を挟んだ本遺跡西側（内出後遺跡第２次：1999年調査）や念代遺跡（025：1993年調査）などで石器が発見されており、内出後遺跡については約28,000年前、念代遺跡については13,000年前の年代が想定されている。

縄文時代については、早期の土器が才ノ内遺跡（150）において確認されている。前期ではサルボウを主体とする関山期の地点貝塚が発見された鳥山貝塚（076：1972・74年調査）のほか、阿ら地遺跡（089：2001年調査）や神出遺跡（111：1998年調査）などで土器片が確認されており、また本遺跡西側でも縄文土器や玦状耳飾りが発見されている。ただし中期の遺跡については、対岸の右籾地内谷津奥部などに大規模な遺跡が確認されているものの本遺跡の近隣では確認例が少なく、後期・晩期については比較的遺跡が希薄である。

弥生時代については、鳥山遺跡（076）において弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されている。なお県道を挟んだ本遺跡西端の住宅地において、弥生時代中期頃の再葬墓の可能性がある土器が発見されている。茨城県南部における当時代の資料は確認例が大変少ないため、今後の研究に期待される。

古墳時代以降になると比較的遺跡の展開が進み、本遺跡の他に念代遺跡、平坪遺跡（026：1993年調査）、永峰遺跡（027：1980年調査）、鳥山遺跡、阿ら地遺跡、いさろ遺跡（090：2000年調査）、神出遺跡、東出遺跡（153：1997年調査）、谷畑遺跡（468：2001年調査）などが調査され、大きな成果が挙げられている。遺跡の傾向としては古墳時代前期と後期及び奈良平安時代に繋がる集落が比較的目立つが、阿ら地遺跡など古墳時代中期から後期に形成された集落も存在する。本遺跡西側の調査でも古墳時代中期から後期の住居跡が多い。また鳥山遺跡のように古墳時代から奈良・平安時代の住居跡約350軒が発見されている大集落も存在する。それに比べ古墳は桜ヶ岡古墳（092）が確認されているのみであり、花室川流域でも本遺跡より西側や東側には古墳群が存在していることから見れば、丁度本遺跡の周囲だけが比較的希薄な地域となっていることが分かる。

第22図　周辺の遺跡

中世の遺跡については、溝や土坑が確認された霞ヶ岡遺跡（083：1996年調査）や、地下式坑29基が確認された神出遺跡、土坑や火葬墓が発見された東出遺跡、テラス状遺構が発見された中居遺跡（154：1997年調査）などのほか、本遺跡西側でも土坑や青磁片が発見されている。なお本遺跡南側には舌状台地先端部を利用して構築された南古屋敷館跡（148）もあり、周辺は中世の遺跡が非常に濃密である。また、本遺跡南東側の旧村落内にある如宝寺は寺伝では寛

喜３年（1231）の開山といわれ、南北朝～室町初期の作と見られる薬師如来像が伝わっている。

近世では、本遺跡周辺で多数の墓坑が確認されているほか、花室川に面した水田中より寛永通寶四文銭・文久永寶約600枚が出土している。

近代の遺構としては、永峰遺跡周辺に築かれていた霞ヶ浦海軍航空隊関連の防空施設として高角砲陣地があり、永峰遺跡周辺に一部が現存している。

第６表　遺跡対象表（内出後遺跡）

番号	遺跡名	番号	遺跡名
087	内出後遺跡【今回調査地】	090	いさろ遺跡
025	念代遺跡	091	桜ヶ丘遺跡
026	平坪遺跡	092	桜ヶ丘古墳
027	永峰遺跡	111	神出遺跡
029	堂地塚遺跡	148	南古屋敷館跡
030	沖の台遺跡	150	才ノ内遺跡
076	鳥山遺跡（鳥山貝塚を含む）	153	東出遺跡
083	霞ヶ岡遺跡	154	中居遺跡
088	油麦田遺跡	173	橘下遺跡
089	阿ら地遺跡	468	谷畑遺跡

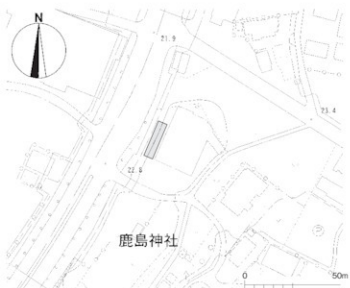
参考文献

土浦市教育委員会1974『土浦市史別編　土浦歴史地図』
土浦市史編さん委員会1975『土浦市史』
茨城県住宅供給公社1975『土浦市烏山遺跡』
茨城県教育委員会1982『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅲ』
土浦市教育委員会1984『土浦の遺跡』
土浦市教育委員会1988『茨城県土浦市烏山遺跡』
永山正1989『土浦町内誌』
茨城県1995『茨城県史料考古資料編　奈良・平安時代』
（財）茨城県教育財団1996『右籾貝塚東遺跡　内路地台遺跡　念代遺跡　平坪遺跡　茨城県教育財団調査報告第111集』
上高津貝塚ふるさと歴史の広場1997『土浦の遺跡２　花室川の歴史と文化』
上高津貝塚ふるさと歴史の広場1998『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第3号
土浦市教育委員会1999『東出・神出・中居遺跡』
石川功2000「近世銭貨の生産流通についての一考案－土浦市小岩田町で発見された一括出土銭をもとに－」『茨城県史研究』84号
上高津貝塚ふるさと歴史の広場2000『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第6号
上高津貝塚ふるさと歴史の広場2001『土浦の遺跡５　土浦の旧石器』
土浦市教育委員会2001『いさろ遺跡』
土浦市教育委員会2002『阿ら地遺跡』
（財）茨城県教育財団2002『谷畑遺跡　茨城県教育財団報告第194集』
上高津貝塚ふるさと歴史の広場2005『土浦の遺跡９　花室川に生きた古代人』

第３節　調査の経過

（１）調査区の設定

９月12日の確認調査で遺構が確認されたところをもとに、東西約５m×南北約20mの範囲の表土を除去し、発掘調査区とした。



第23図　調査区位置図

（２）調査日誌抄

９月18日　調査開始遺構確認。南側溝状遺構完掘。
19日　屋外炉完掘。北側覆土除去。
25日　北側遺構確認・発掘開始。３号土坑より人骨出土。
28日　６・７・８号土坑完掘。
10月１日　５号土坑完掘。
２日　２号土坑完掘。
３日　慰霊祭。３・４号土坑完掘。
４日　１号土坑完掘。全体平面図作成。調査終了。

第４節　発掘調査の概要

検出された遺構と遺物

検出の状況

確認調査では調査区南側から表土除去を実施した。南側では表土下約35㎝で関東ローム層が確認されたことから、この高さで表土を除去していくと、北側約１／２ではローム層が確認できず、全て暗褐色土となった。この部分については当初大型の竪穴住居跡の存在を推定したが、調査を進めるに従い、この部分は住居跡ではなく以前に何らかの理由によって50㎝ほどロームが削られ、その後に暗褐色土が堆積したものであることが明らかとなった（SX-1）。そのため中央部及び北側で検出された竪穴住居跡（SI-1）及び１号土坑～８号土坑（SK-1～8）は、この暗褐色土を除去した表土下約80㎝の面を確認面として検出したものである。

屋外炉〔SL-1〕（第24図　PL.10）

位置：調査区南側。

規模・形態：やや不整な楕円形。

長径約２m、短径約1.35m。

長径方向：N-80°-E

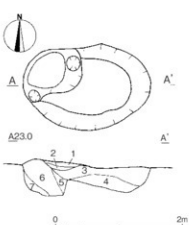
断面形態：確認面から深さ0.5～0.6m。

やや不整であるが西側の方が低い２段状を呈している。

覆土：８層に大別される。最も焼土が多いのは２層である。

出土遺物：覆土中から花崗岩の焼礫1点が出土している。

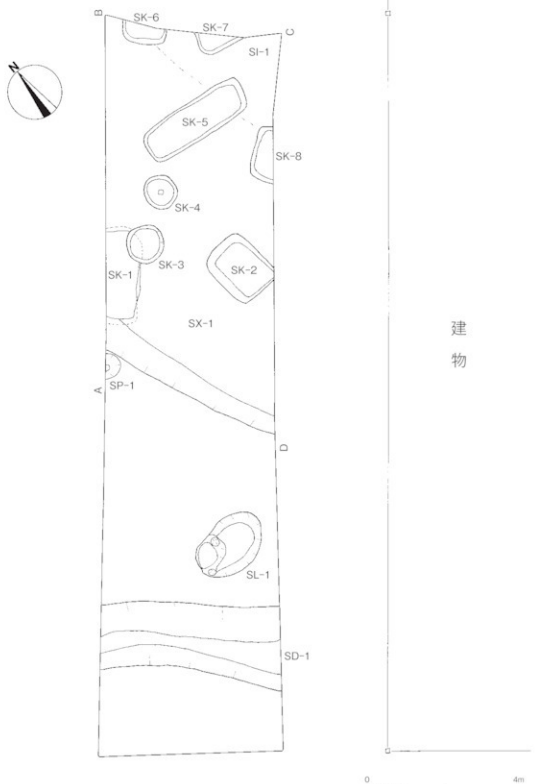
時期・性格：形態から縄文時代の屋外炉と推定される。



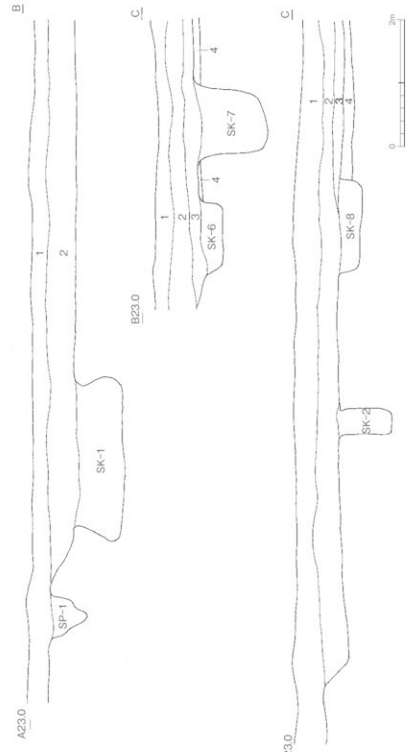
第24図　ＳＬ－１平面・断面図

SL-1土層

1．黒褐色土　多量の焼土粒を含む。粘性・締りやや強い。
2．赤褐色土　焼土粒。粘性・締りとも弱い。
3．黒褐色土　炭化物・ローム細粒を少量含む。粘性はあるが締りは弱い。
4．暗褐色土　ローム細粒をやや多く含む。締りはやや強い。
5．暗褐色土　４層よりローム細粒が少ない。
6．褐色土　　ローム粒をやや多めに含む。粘性・締りとも弱い。
7．褐色土　　ローム粒が非常に多い。粘性・締りとも弱い。



第25図　調査区全体図



SI-1・SX-1土層

1．暗褐色土　表土。
　粘性・締りとも弱い。
2．暗褐色土　不明遺構(SX-1)の覆土。比較的不純物を含まない。粘性は弱いが締りはややある。
3．暗褐色土　不明遺構(SX-1)の覆土。ローム粒・ロームブロックを少量含む。粘性・締りとも弱い。
4．黒褐色土　竪穴住居跡(SI-1)の覆土。黒色土に少量のローム細粒を含む。

※C－Dについては図版構成上反転させていますのでPL.12の写真とは方向が異なります。

第26図　調査区・ＳＩ－１・ＳＸ－１土層断面図

竪穴住居跡〔SI-1〕（第25・26図　PL.11・12）

位置：調査区北東端。

規模・形態：床面の一部が確認されたのみで、規模・形態とも不明。全体に削平を受けており遺構の残りは極めて悪い。

主軸方向：不明。

覆土：住居跡に堆積した覆土の一部が部分的に１層だけ確認できた。

壁：全体に削平を受けており壁は確認できなかった。

床：全体に遺存状況は極めて悪い。部分的に確認できたところでは床面は踏み締められていた。また住居跡床面には本住居に伴う施設は確認できなかった。なお、床面には部分的に炭化物のまとまった堆積が見られたが、床自体には火災による痕跡が見られなかった。

遺物出土状況：本住居跡の遺物は削平時に失われたと思われ、明確な遺物は確認されなかった。

時期：形態から本竪穴住居跡は古墳時代～奈良・平安時代頃のものではないかと推定される。

不明遺構〔SX-1〕（第25・26図　PL.11・12）

位置：調査区北側。

規模・形態：確認できた部分で南北約10.5m、東西約4.5mの大型の掘り込みである。確認された部分では非常に緩やかな弧状を描く。

長径方向：－

断面形態：確認面から深さ0.5～0.6m。底部は平坦。

覆土：３層に大別される。自然堆積を示す。

出土遺物：覆土より砥石１点及び須恵器・土師器片約1.3kgが出土しているが、混入と思われる。そのうち特徴的なものについて図示した。

時期・性格：不明。土層断面観察から推定するとSK-1・3・4より新しく、SK-2より古い可能性が想定される。

溝〔SD-1〕（第27図　PL.9・10）

位置：調査区南側。

規模・形態：やや弧を描きながら両端は東・西調査区外に延びる。確認された部分で長さ4.7m。幅1.7～2.3m。

流路方向：底面のレベルは西側の方がやや高い。

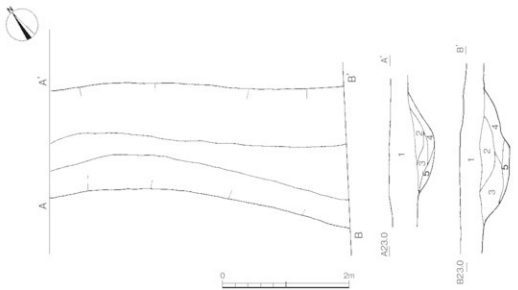
断面形態：浅い皿状。確認面から深さ約0.4m。

覆土：東・西側端とも４層に大別される。自然埋没を示す。

出土遺物：覆土中より縄文土器・土師器・須恵器・中世土師質土器片など約350ｇが出土している。大半は混入と思われるが、中世と思われる土師質土器１点を図示した。

時期：中世～近世と推定される。

性格：不明



第27図　ＳＤ−１平面・断面図

SD-1土層

1．暗褐色土　表土。粘性・締りとも弱い。
2．暗褐色土　ローム細粒を多めに含む。粘性・締りとも弱い。
3．暗褐色土　２層にロームブロックをやや多めに含む。粘性・締りとも弱い。
4．褐色土　　ローム等の混入が少なく比較的純粋な褐色土。粘性・締りとも弱い。
5．褐色土　　ローム崩落土を多く含む。粘性・締りとも弱い。

１号ピット〔SP-1〕（第28図　PL.12）

位置：調査区中央部西壁際（SX-1より南側）。１号土坑の南側約１m。
規模・形態：円形。径約0.6m
長径方向：−
断面形態：浅い円錐形を呈す。確認面から深さ約0.3m。
覆土：２層に大別される。ロームブロックを多く含み一括埋め戻しを示す。
出土遺物：覆土より土師器片約10ｇが出土しているが、混入と思われる。
時期・性格：不明。

１号土坑〔SK-1〕（第28図　PL.13）

位置：調査区中央部西端壁際。北東角は３号土坑と重複するが、切り合い形態から見て本土坑の方が古い。
規模・形態：西側は調査区外にあるため不明な点もあるが、長方形または方形を呈していると思われる。長軸は上部約2.2m・底部約2.5m、短軸約１m。
長径方向：（推定）N-37°-E
断面形態：確認面から深さ約0.8m。長軸は上部よりも底部の方がやや長い袋状を呈している。短軸側はほぼ垂直に立ち上がる。
覆土：４層に大別される。大部分はロームブロックを多く含み人為的に埋め戻されたと思われるが、

最後に堆積した中央部は自然埋没と思われる。
出土遺物：覆土より土師器・須恵器片約180ｇが出土しているが、混入と思われる。
時期：３号土坑より古いことが確認できるので、中世かと思われる
性格：不明。形態・埋め戻し状況から地下式坑である可能性が想定される。

２号土坑〔SK-2〕（第28図　PL.13）
位置：調査区中央部東端。
規模・形態：東角は調査区外であるが、長方形を呈している。長軸約1.7m、短軸約1.3m。
長径方向：N-10°-W
断面形態：確認面から深さ約0.8m。箱形を呈する。
覆土：２層に大別される。ロームブロックを多く含み一括埋め戻しと思われる。
出土遺物：覆土より縄文土器・土師器・須恵器片約190ｇが出土しているが、混入と思われる。
時期・性格：不明。

３号土坑〔SK-3〕（第28図　PL.13）
位置：調査区中央部北西寄り。１号土坑と重複するが、切り合い形態から見て本土坑の方が新しい。
規模・形態：円形。径約１m。
長径方向：－
断面形態：箱状。確認面から深さ約0.6m。
覆土：１層である。ロームブロックを多く含み一括埋め戻しを示す。
出土遺物：底面近くより人骨１体分が確認された。また側面壁際より桶の側面固定に使われていたと思われる和釘10点以上、覆土より銭貨６（寛永通寶３・未確認３）などが出土した。
時期：近世。出土銭のうち１枚目の「寶」の字がハ貝と思われることから、新寛永（元禄10：1697～）が含まれていると思われる。
性格：形態から墓壙（座棺・早桶）と考えられる。

４号土坑〔SK-4〕（第28図　PL.13）
位置：調査区中央部北西寄り。３号土坑の北東0.5m。
規模・形態：円形。径約0.9m。
長径方向：－
断面形態：箱状。確認面から深さ約１m。底面中央部に約10㎝四方の浅い窪みが確認できた。
覆土：２層に大別される。ロームブロックを多く含み一括埋め戻しを示す。なお発掘時に中央部で垂直に細い筒状の空間が検出された。底部中央の窪みと一体になっていたと思われることから、墓標が腐朽してできた空間であったのではと思われる。
出土遺物：底面より人骨１体分が確認された。また覆土中より漆椀の残欠と思われる漆片及び銭貨１（銭種不明１）と錆付いた鉄片、片側面・底面近くより桶の側面固定に使われていたと思われる和釘20点以上と桶材の残欠、また中央部の空洞より墓碑の残欠と思われる木片１が出土している。

時期：近世。銹付いた鉄片が鉄銭であれば、鉄銭の鋳造年代（元文４：1739）より新しいことになる。
性格：形態から墓壙（座棺・早桶）と考えられる。

５号土坑〔SK-5〕（第28図　PL.14）
位置：調査区北寄り。４号土坑の北東0.5m。
規模・形態：隅のやや丸い長方形。長軸約３m、短軸約１m。
長径方向：N-87°-W
断面形態：浅い箱状を呈す。確認面から深さ約0.3m。
覆土：３層に大別されるが、ロームブロックを多く含み一括埋め戻しと思われる。
出土遺物：覆土より縄文土器・土師器・須恵器片約280ｇが出土しているが、混入と思われる。
時期・性格：不明。

６号土坑〔SK-6〕（第28図　PL.14）
位置：調査区北端壁際。
規模・形態：北側が調査区外にあるため不明な点もあるが、隅のやや丸い方形または長方形と思われる。東西約1.2m×南北約0.5m（確認部分）
長径方向：（推定）N-40°-W
断面形態：浅い箱状を呈す。確認面から深さ約0.3m。
覆土：１層である。ロームブロックを多く含み一括埋め戻しを示す。
出土遺物：覆土より縄文土器・土師器片約100ｇが出土しているが、混入と思われる。
時期・性格：不明。

７号土坑〔SK-7〕（第28図　PL.14）
位置：調査区北端壁際。６号土坑の南東側約0.8m。
規模・形態：確認されたのはやや隅の丸い角部のみであり、大半は調査区外であるため不明な点もあるが、方形または長方形と推定される。東西約１m（確認部分）×南北約0.6m（確認部分）
長径方向：（推定）N-70°-W
断面形態：確認された部分では箱状。確認面から深さ約１m。
覆土：１層である。ロームブロックを多く含み一括埋め戻しを示す。
出土遺物：覆土より土師器片約30ｇが出土しているが、混入と思われる。
時期・性格：不明。

８号土坑〔SK-8〕（第28図　PL.14）
位置：調査区北寄り東端壁際。
規模・形態：東側が調査区外にあるため不明な点もあるが、方形または長方形と推定される。東西約0.5m（確認部分）×南北約1.4m
長径方向：（推定）N-35°-W

断面形態：浅い箱状を呈す。確認面から深さ約0.3m。
覆土：2層に大別される。ロームブロックを多く含み一括埋め戻しを示す。
出土遺物：覆土より土師器片約80ｇが出土しているが、混入と思われる。
時期・性格：不明。

SP-1・SK-1～8土層

SP-1
1．暗褐色土　ロームブロックを少量含む。粘性はないが締りはややある。
2．明褐色土　ロームブロックを主体とする。締りはやや強い。

SK-1
1．暗褐色土　ロームブロックを少量含む。粘性・締りとも弱い。
2．褐色土　ローム細粒を少量含む。粘性・締りとも弱い。
3．明褐色土　ロームブロックに暗褐色土ブロックを少量含む。粘性・締りともにややある。
4．明褐色土　ロームブロックに暗褐色土ブロックを若干含む。粘性・締りともにややある。

SK-2
1．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性は弱いが締りはややある。
2．暗褐色土　土質の特徴は1層と似るが、締りが非常に弱く、ボソボソしている。

SK-3
1．暗褐色土　ロームブロックをやや多めに含む。粘性・締りともに弱い。

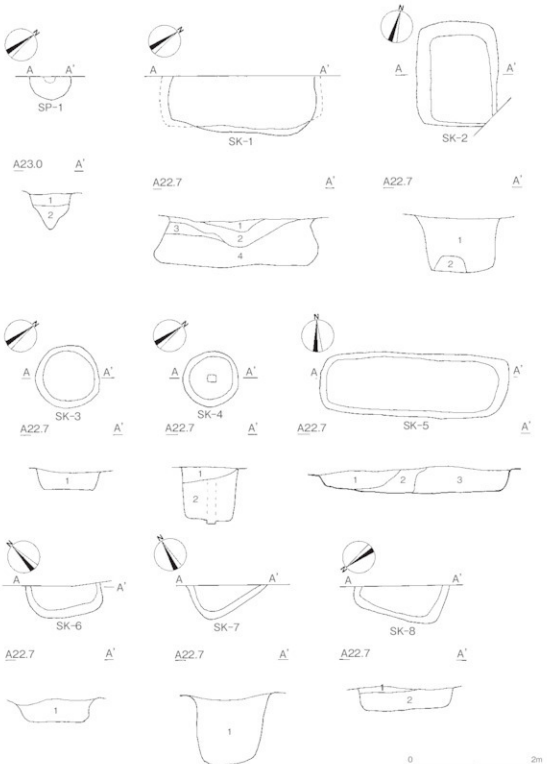
SK-4
1．暗褐色土　ロームブロックを部分的に多く含む。粘性・締りとも弱い。
2．暗褐色土　ロームブロックをまんべんなく多量に含む。粘性・締りとも弱い。

SK-5
1．暗褐色土　ローム粒を少量含む。粘性・締りとも弱い。
2．暗褐色土　ロームブロックを多めに含む。粘性は弱いが締りはやや強い。
3．黄褐色土　ロームブロックを非常に多く含む。粘性は弱いが締りはやや強い。

SK-6
1．暗褐色土　ロームブロック・ローム粒を多めに、かつ均質に含む。粘性・締りは弱い。

SK-7
1．暗褐色土　ロームブロック・ローム粒を多めに、かつ均質に含む。粘性・締りは弱い。

SK-8
1．褐色土　ロームブロックを少量、ローム粒をやや多めに含む。粘性・締りともに弱い。
2．褐色土　ロームブロックをやや多めに含む。粘性・締りともに弱い。



第28図　ＳＰ－１・ＳＫ－１～８　平面・断面図

出土遺物（第29図　PL.15）

今回の調査で出土した遺物は約25kgで総量的には土師器・須恵器が多く、縄文土器も含まれている。これらの資料から見れば､今回の調査では明確ではなかったものの本調査区の周辺には縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡が存在しているものと推測される。なお少量ではあるが、溝から出土した土師質土器や不明遺構から出土した陶器など、遺構に伴うと思われるものもある。

3号・4号土坑は人骨が出土した江戸時代の墓壙であり、銭貨や漆片は副葬品である。

第29図　出土遺物実測図

第７表　出土遺物観察表

図版No.	器種種類	法量（cm）	出土位置・残存率・焼成	胎土	色調	器形の特徴	整形	備考遺物注記
1	土師質土器	A：- B：(1.5) C：[5.2]	ＳＤ覆土 10% 普通	砂粒やや多	橙色	底部切り離しはやや不整	外面：体部ナデ 内面：指ナデ 底部：糸切り・スノコ痕	底部のみ 46ｇ ＫＥＵ－ ＳＤ１フク土
2	土師器壺	A：[20.4] B：(6.7) C：-	ＳＸ覆土 ５% 普通	白色砂少量・砂粒少量	にぶい黄褐色	口縁は貼り付けの複合口縁で外反。外面に２条の擦痕有	外面：口縁部横ナデ 内面：口縁部横ナデ（刷毛状）	口縁のみ 98ｇ ＫＥＵ－ ＳＸ１フク土
3	陶器すり鉢	A：- B：(6.2) C：-	ＳＸ覆土 破片 良好	長石粒や多め	胎土灰白 釉明赤褐色	体部に弱い稜有	内面に５条から成る粗い擂り目	体部のみ 30ｇ ＫＥＵ－ ＳＸ１フク土
4	石製品砥石		ＳＸ覆土 50%					68ｇ、凝灰岩 ＫＥＵ－ ＳＸ１フク土
5	銭貨寛永通寶一文銭	最上面（１枚目） 2.274×2.266 ６枚目 2.267×2.254	SK-3 覆土 完存 ６枚が錆付			１枚目はコ通・ハ貝、５枚目はス貝、６枚目はコ通・ス貝	１枚目・４枚目・５枚目の表裏の方向は同じ、６枚目のみ逆	６枚重量15.9ｇ １・５・６枚目は寛永通寶であることが確認できたが他は不明。 ＫＥＵ－ ＳＫ３フク土
6（写真のみ）	銭貨及び不明鉄片	3.47×4.67	SK-4覆土			銅銭（銭文不明）と鉄片が錆付	表面に粗い布痕があるので布（袋？）に包まれていたと思われる	22.3ｇ 鉄片は鉄銭である可能性も考えられる
7（写真のみ）	鉄釘	良好なものは長さ約3.3㎝	SK-3・4 覆土			形状はＴ字形。体部の断面形状は四角。	木片付着	
8（写真のみ）	木片	長さ32.6 幅2.4	SK-4覆土					10.3ｇ 中央部空洞内出土
9（写真のみ）	漆片	漆塗膜のみ遺存	SK-4覆土			やや破片が内彎しているので椀かと思われる	表裏面とも赤いものと茶色いものが確認できる	□に大の文字がある破片あり

第５節　考察

内出後遺跡（第１次調査地点）の土地利用について

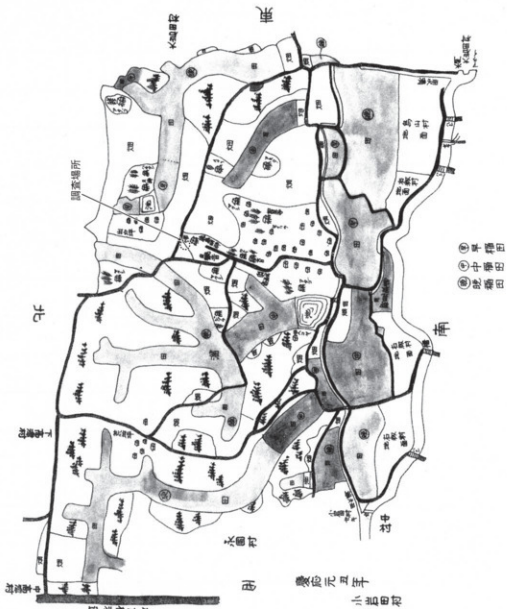
今回の調査は小さな面積の調査であったが、屋外炉１基、竪穴住居跡１軒、溝１条、土坑８基、不明遺構１基などを確認することができた。このうち土坑については、人骨が確認された２基については江戸時代の墓壙であり、その他の土坑についても一括埋没の形態から見れば墓壙の可能性も想定されるものもある。

ところで工事開始前、調査箇所は畑地であり墓地は存在しておらず、また地元でもここに墓地があることについては知られていなかった。しかし今回の調査区及び県道荒川沖・木田余線を挟んだ本遺跡西側（内出後遺跡〔第２次調査〕：平成11年（1999）調査）でも墓壙が確認されており、また隣接する動物病院の建設時にも人骨が出土したことが知られているので、中世～近世頃には本遺跡の辺りは比較的広く墓域として利用されていたことが推定される。

そこで本調査地周辺の土地利用について調べてみると、慶応元年（1865）に描かれた小岩田村絵図（第30図）には、如宝寺のほかにも数か所に寺院に関係すると思われる表記があり、特に鹿島神社南西側の本遺跡が存在していたと思われる辺りには「観音」「ヤクシ」と書かれていることが確認できる。また『土浦町内誌』では、江戸時代の小岩田村には如宝寺のほかに永国大聖寺の末寺として『福性院』『吉祥院』『薬師院』という寺院があったと記されている。この本遺跡に相当する「観音」「ヤクシ」の場所がこれらのどの寺の持ち分であったのかは定かではないが、これらが本遺跡の近世墓と関連していたであろうことは想像に難くない。ただし、明治16年（1883）10月頃に描かれた地図（第29図）を見ると、本遺跡の辺りにはすでに鹿島神社以外には目立った表記が無く畑となっているのみで、周辺に存在していたはずの寺院については何も描かれていない。このことから、明治初期にはこれらの寺は廃寺または統合され、墓地もどこかに移転してしまったため、その後の人々の記憶から、今回発掘調査が行われるまでここに墓地であったことが忘れ去られてしまっていたものと思われる。

第30図　明治前期の小岩田村周辺

（（財）日本地理センター発行『第一軍管地方二万分一迅速測図原図〔復刻版〕』を部分拡大）



第31図　慶応元年の小岩田村絵図（「土浦歴史地図」より：原図・国立史料館所蔵）

第Ⅳ章　総括

今回報告した３遺跡はそれぞれ短期間・小面積の発掘調査ではあるが、滑石製管玉未成品が出土した玉作工房跡である浅間塚西遺跡、市街化が進んだ地域の中での数少ない発掘調査事例となった房谷遺跡、地元でも忘れ去られていた墓域が発見された内出後遺跡など、重要な遺跡の発掘調査事例であると考えている。

特に浅間塚西遺跡は、古墳時代前期の管玉製作工房跡として、市内鳥山の鳥山遺跡やおおつ野の八幡脇遺跡などと共に、霞ヶ浦沿岸地域の古墳時代の玉作遺跡の在り方・玉作技法を研究するための一例として今後も検討されることが予想される遺跡である。なお、房谷遺跡では検出例が少ない関東ローム層より上の竪穴住居の壁構造を部分的に検出できたし、内出後遺跡でも腐朽してなくなってしまうことが多い木製品や漆製品の一部を検出することができたのは大きな収穫である。

今回の調査事例は報告の通り非常に狭小な調査範囲ではあったが、今回の調査によって初めて明らかにできたこともあり、今後、調査研究が進めば地域の歴史を語る上で大変重要な遺跡となる可能性を示している。近年では一時期に比べれば開発行為自体も小規模なものが増加し、遺跡調査も小面積のものが増加する傾向があるが、文化財保護・遺跡研究の面からも、そのような遺跡調査でも非常に重要であることを示している。

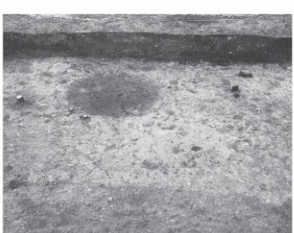
なお、今回の３遺跡は、約20年前の発掘調査であったが、諸般の事情によりずっと報告されずに現在まで残ってしまっていたものである。発掘調査時にご協力・御指導・御助言いただいた諸関係機関、関係者の皆様に多大なご迷惑をお掛けしたことをお詫びするとともに、厚く感謝の意を表します。

遺構検出状況（南より）

遺構検出状況（西より）

管玉未成品集中区出土状況（１）

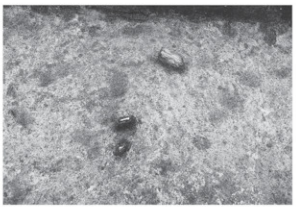
管玉未成品集中区出土状況（２）



竪割未成品・管玉未成品・砥石？出土状況

竪割未成品出土状況

PL.2



管玉未成品・砥石？出土状況

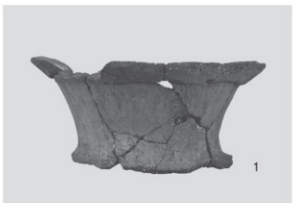
赤色顔料出土状況（1）

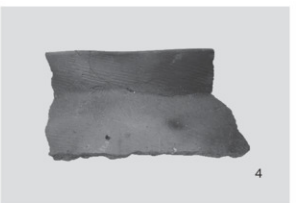
赤色顔料出土状況（2）

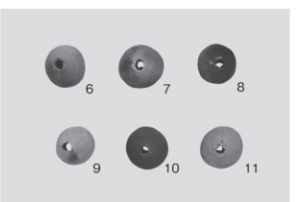
遺構完掘（南より）

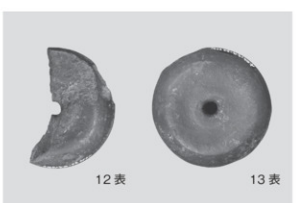
遺構完掘（北より）

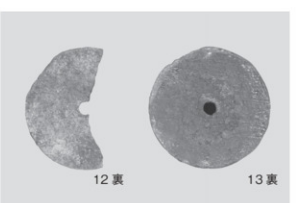
住居内貯蔵穴











出土土器・土製品

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

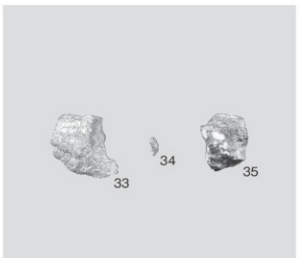
30

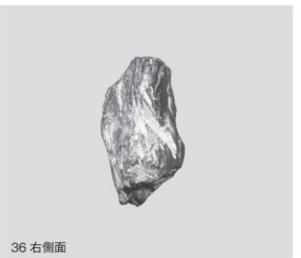
31

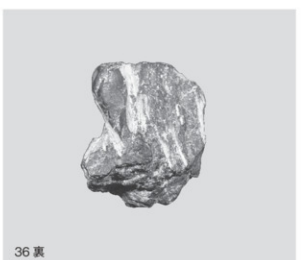
32

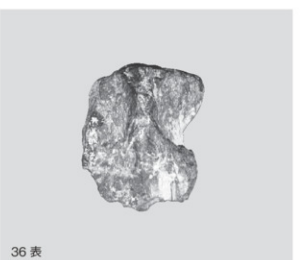
出土管玉未成品

PL. 6

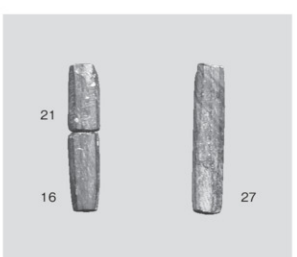








出土形割未成品・剥片

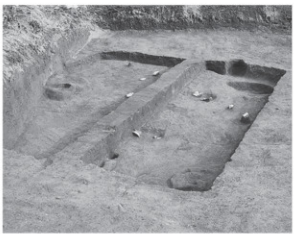


16・21 接合と 27 の比較

16・21 切裁面拡大

浅間塚西遺跡出土管玉未成品の製作工程

遺構検出状況

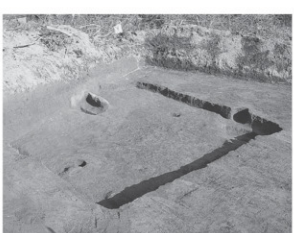


遺物出土状況

土層堆積状況

カマド確認状況

カマド土層断面



遺構完掘

1

2

3

出土土器

調査前

表土除去状況

表土除去後の状況（全景）

溝（SD-1）検出状況

溝（SD-1）土層断面

PL.10

溝（SD-1）完掘

屋外炉（SL-1）検出状況

屋外炉（SL-1）土層断面

屋外炉（SL-1）完掘

不明遺構（SX-1）検出状況

不明遺構（SX-1）完掘及び土坑（SK-1・2・3・4・ 5・8）検出状況

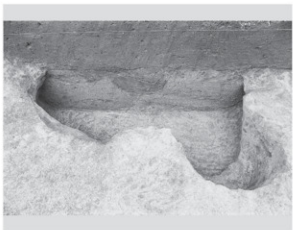
不明遺構（SX-1）完掘及び土坑（SK-6・7）ならびに竪穴住居跡（SI-1）検出状況

不明遺構（SX-1）及び竪穴住居跡（SI-1）土層断面（北東側）

不明遺構（SX-1）土層断面（南東側）

竪穴住居跡（SI-1）完掘

ピット（SP-1）完掘

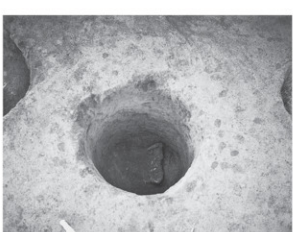


1号土坑（SK-1）完掘

2号土坑（SK-2）完掘

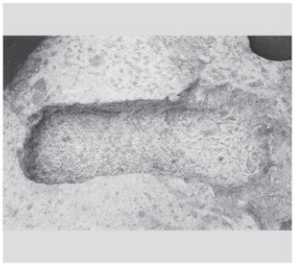
3号土坑（SK-3）人骨出土状況

3号土坑（SK-3）完掘



4号土坑（SK-4）人骨出土状況

4号土坑（SK-4）完掘



5号土坑（SK-5）完掘

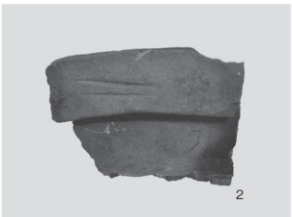
6号土坑（SK-6）完掘

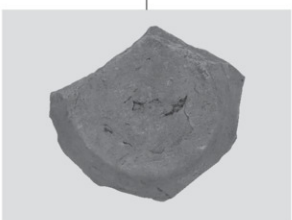
7号土坑（SK-7）完掘

8号土坑（SK-8）完掘

不明遺構（SX-1）及び土坑（SK-1～8）・竪穴住居跡（SI-1）完掘状況

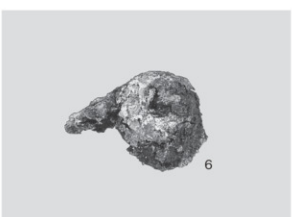
1


2



3

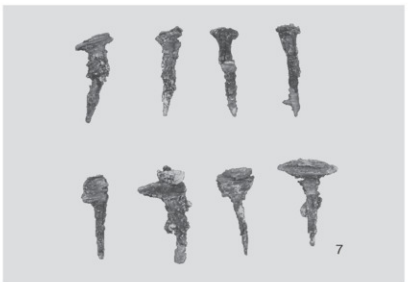
4


6

5
1枚目

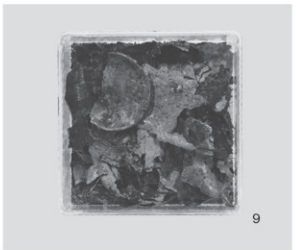
5
6枚目

出土遺物（1）

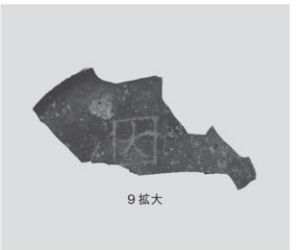


7

8



9



9拡大

出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	せんげんづかにしいせき・ふさたにいせき・うちでうしろいせき（だいいちじちょうさ）
書　名	浅間塚西遺跡・房谷遺跡・内出後遺跡（第１次調査）
副書名	土浦市内開発行為に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	
編著者名	石川　功・黒澤春彦・中澤達也・窪田恵一
編集機関	土浦市遺跡調査会
所在地	〒300-0811　℡029(826)7111 茨城県土浦市上高津1843　上高津貝塚ふるさと歴史の広場内
発行機関	土浦市教育委員会
発行年月日	西暦2011年（平成23）３月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度 北緯	経緯度 東経	調査期間	調査面積	調査原因
浅間塚西遺跡	土浦市木田余字浅間台2915　他	08203	250	36° 05分 35秒	140° 12分 53秒	1988（昭和63）.10.03～11	100	納骨堂建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浅間塚西遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡（玉作工房跡）１	土師器・土製品　管玉未成品	滑石製管玉未成品研磨・穿孔未成品出土。研磨未成品を切截し２分割している。

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度 北緯	経緯度 東経	調査期間	調査面積	調査原因
房谷遺跡	土浦市小松３丁目740-1	08203	145	36° 03分 43秒	140° 12分 19秒	1990（平成２）.01.17～26	50	特別養護老人ホーム建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
房谷遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡１	土師器	古墳時代後期の竪穴住居跡。壁の立ち上がりが部分的に良好に確認できた。

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度 北緯	経緯度 東経	調査期間	調査面積	調査原因
内出後遺跡（第１次調査）	土浦市小岩田東１丁目1233-１他	08203	087	36° 03分 19秒	140° 12分 01秒	1990（平成２）.09.17～10.04	100	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内出後遺跡（第１次調査）	集落跡・その他	縄文・古墳・近世	屋外炉１・竪穴住居跡１・不明遺構１・溝１・土坑８	土師質土器・陶器・銭貨・木片・漆片	４号土坑の底面に四角い凹み有。３号土坑から人骨・銭貨、４号土坑から人骨・木片・漆片出土。

要　約	浅間塚西遺跡で確認された竪穴住居跡は、内部にベッド状遺構・間仕切り溝・貯蔵穴などを備え、滑石製管玉未成品が出土したことから、古墳時代前期の玉作工房跡と思われる。房谷遺跡で確認された竪穴住居跡では、ローム層の上まで壁の立ち上がりが確認できた。内出後遺跡で発見された土坑は主に近世の墓壙と思われ、中世～近世にこの辺りが広く墓域であったことを窺わせる。

本書の仕様は次のとおりです

1．紙質（長期保存を考慮し、表紙以外は中性紙を使用しています）

○表紙　　レザック66　4／6判175kg　象牙（マットPP加工）

○見返し　　上質紙A判70.5kg

○扉　　上質紙A判57.5kg

○序文・例言・凡例・目次・本文

書籍用紙A判46.5kg

○写真図版　マットコート紙A判70.5kg

2．印刷　オフセット印刷

○写真図版　200線

本報告書の内容について、本文・凡例に出典を明示している図版以外については、文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合には、著作権者の承諾なく本報告書の一部を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。（なお出典を明示した図版等の使用については、別途御確認ください）

この報告書に係る記録図面類（写真類を含む）を利用する場合は、土浦市教育委員会に連絡して、必要な手続きをとってください。

茨城県土浦市

浅間塚西遺跡・房谷遺跡・内出後遺跡（第1次調査）

―土浦市内開発行為に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

発　行　日　2011年3月25日

編　　集　土浦市遺跡調査会

発　　行　土浦市教育委員会

問い合わせ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場

〒300-0811　茨城県土浦市上高津1843

℡ 029（826）7111　Fax 029（826）6088

e-mail：kaizuka@city.tsuchiura.lg.jp

印　　刷　株式会社　横山印刷